

# 原田遺跡

長野県上伊那郡中川村大字片桐原田

緊急発掘調査報告書

1981

南信土地改良事務所  
中川村教育委員会

# 原田遺跡

長野県上伊那郡中川村大字片桐原田

緊急発掘調査報告書

1981

南信土地改良事務所  
中川村教育委員会

## 序

原田遺跡は、国鉄飯田線七久保駅の東方約2.6kmの位置で、横前部落にある遺跡であります。ここから西方の刈谷原遺跡へとつづく所です。本調査報告書はこの地域の県営圃場整備事業にともなう埋蔵文化財包蔵地の緊急発掘による記録保存の報告書であります。

昭和56年6月から7月末にかけて、発掘調査を実施しました。ちょうど梅雨期と暑中のため発掘調査は困難でした。

この発掘調査では、縄文晩期終末から弥生頭初のものとしては、例の少い形のはっきりした住居跡が複数確認されたり、また土器片は縄文草創期約1万年前といわれる表裏縄文数個と土盤と呼ばれる有孔円形の土器などが出土しています。この外石斧や、無数の集石群がありました。こうしたえがたい出土品は関係者のひとしく喜びとする所であります。

この調査発掘にあたり、県教育委員会文化課並びに南信土地改良事務所の御指導をいただき、調査団長友野良一先生はじめ、調査員諸氏の御努力と地元の方々の御協力により、無事発掘調査を終了することができました。ここに関係者に対し心から感謝申し上げます。

昭和56年9月

教育長 松村正文

## 例　　言

1. 本書は昭和56年度に実施した、片桐北部地区県営面場整備事業に伴う原田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 事業は南信土地改良事務所の委託により中川村遺跡調査会が実施した。
3. 本報告書は契約期間内（昭和56年度）にまとめることが要求されているため、調査によって検出された遺構及び遺物をより多く図示することに重点を置き文章記述はできるだけ簡略化した。
4. 本文執筆は、友野良一・小木曾清・和田武夫がおこない、遺構関係の図面は、松下千里が製図した。焼土はドットで表現した。なお、縮尺は各図に示してある。
5. 土器の実測、拓影及び石器の実測は高山よし子がおこなった。
6. 土器の分類は友野良一がおこなった。
7. 写真撮影は友野良一、小木曾清、和田武夫がおこなった。
8. 本報告書の編集は教育委員会がおこなった。
9. 遺物及び実測図類は中川村歴史民俗資料館に保管してある。

## 目 次

序

例言

第Ⅰ章 発掘調査の経緯.....	1
第1節 発掘調査に至るまでの経過.....	1
第2節 調査会の組織.....	1
第3節 発掘調査の経過.....	2
第Ⅱ章 遺跡の環境.....	3
第1節 遺跡の位置.....	3
第2節 地形及び地質.....	4
第3節 歴史的環境.....	5
第Ⅲ章 遺構と遺物.....	9
第1節 調査の概要.....	9
第2節 遺構と遺物.....	9
結語.....	37
図版.....	39

〔挿図目次〕

第1図 原田遺跡の位置図	3
〃2〃 原田遺跡の層序	4
〃3〃 原田遺跡付近遺跡分布図	5
〃4〃 原田遺跡付近の地形、発掘区	17
〃5〃 原田遺跡遺構配置図	18
〃6〃 第1号住居址実測図	10
〃7〃 第1号住居址出土遺物	11
〃8〃 第2号住居址実測図	12
〃9〃 第2号住居址出土遺物	12
〃10〃 第3号住居址実測図	13
〃11〃 第3号住居址出土土器	13
〃12〃 第3号住居址出土石器	13
〃13〃 B地区遺構分布図	14
〃14〃 B地区出土遺物分布図	15
〃15〃 第4号住居址実測図	17
〃16〃 第4号住居址出土土器	18
〃17〃 第4号住居址出土石器	19
〃18〃 第5、第6号住居址実測図	20
〃19〃 第5号住居址出土遺物	21
〃20〃 第6号住居址出土土器	22
〃21〃 第6号住居址出土石器	23
〃22〃 A地区地層断面図	24
〃23〃 第7号住居址実測図	25
〃24〃 第7号住居址出土土器	23
〃25〃 第7号住居址出土石器	23
〃26〃 第7号住居址炉断面図	25
〃27〃 第8号址出土土器	26
〃28〃 第8号址出土石器	26
〃29〃 第8号址出土石器	27
〃30〃 第9号址実測図	27
〃31〃 第9号址出土遺物	27
〃32〃 その他の集石遺構	30
〃33〃 溝状遺構断面図	31

第34図 遺構外出土土器	33
" 35 " 遺構外出土土器	34
" 36 " 遺構外出土石器	35
" 37 " A地区出土遺物分布図	36

〔図版目次〕

図版 1 原田遺跡の遠景（上），第1号住居址（下）	40
" 2 第2号（上），第3号（下）住居址	41
" 3 第4号（上），第5，第6号（下）住居址	42
" 4 第7号住居址（上），原田遺跡発掘全景（下）	43
" 5 原田遺跡A地区発掘状況（上），発掘調査参加者（下）	44
" 6 遺物出土状況Ⅰ	45
" 7 遺物出土状況Ⅱ	46
" 8 遺物出土状況Ⅲ	47
" 9 出土遺物Ⅰ	48
" 10 出土遺物Ⅱ	49
" 11 発掘鍵入式（上），B地区発掘状況（中），A地区発掘状況（下）	50

## 第Ⅰ章 発掘調査の経緯

### 第1節 発掘調査に至るまでの経過

県営圃場整備事業地区内の遺跡の調査を委託された場合には、受託するよう県教育委員会より昭和55年10月9日付通知をもって村教育委員会に連絡があり、おって南信土地改良事務所より緊急発掘調査について委託したい旨、村教育委員会への依頼を受け、両者と協議の結果、村教育委員会の編成した中川村遺跡調査会が中心になり、原田遺跡発掘調査団をこの中に含めて業務を遂行することになった。

昭和56年6月3日南信土地改良事務所長と村長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約」を締結し6月19日村遺跡調査会を開催し原田遺跡発掘計画について協議し、后現地において発掘式を挙行し、翌6月20日より調査団により調査を開始した。

### 第2節 調査会の組織

#### 中川村遺跡調査会

会長	松村 正文	(村教育長)
理事	松村 安雄	(村教育委員長)
"	荒井 健	(村文化財調査委員)
"	平澤 善吉	( " )
"	新井 稔	( " )
"	下平 元護	( " )
"	河崎 宣夫	( " )
"	富永 精一	(村教育委員)
"	杉澤 要	( " )
"	齐藤 英雄	( " )
監事	松崎 伝重	(村委会監査委員)
"	北島 直一	( " )
幹事	湯澤 幸雄	(教育次長)
"	鈴木 久美子	(教育委員会主任)
"	松下 千里	( " 嘴託)

#### 原田遺跡調査団

団長	友野 良一	(日本考古学协会会员) (発掘担当者)
調査員	和田 武夫	(長野県考古学会会員)
"	小木曾 清	

### 第3節 発掘調査の経過

昭和56年6月19日午后関係者により鍬入式をおこない、翌20日から表土削りのため重機が入って作業を始める。一方発掘器材の運搬を行う。そして調査作業上の休憩場及び器材収納所は地元の松崎伝重氏のご好意により空家になっている小屋をお借りすることができたので、これを整頓し器材を点検し収納を行う。

24日友野団長から発掘の目的及び今後の調査日程の説明を受けて本格的に発掘調査を進める。先づ調査団で協議をおこない発掘区を土手の東側をA地区西側をB地区と命名して、A地区から東西方向にA, B, C……南北方向に1, 2, 3, ……と5mグリットを設定して調査をおこなった。

作業を始めた頃は梅雨期に入っていたので途中で作業打切ったり休んだりしたが本格的には7月4日からは天候も定まって表土削りから調査が進められた。7月6日ブルトーラーにて東側の土手を一部とり除きA-10近くに序層調査のためショベルにて約3m余の穴を掘る。7月13日からB地区を調査すべくA地区と2班に分けて作業をすることにしA地区は小木曾調査員、B地区を和田調査員が担当して調査を進める。16日B地区で遺構と思われる3箇所を掘りさげる翌17日住居址3戸が並んで確認された。又A地区でも住居址と思われるものが発見された。20日で一応発掘作業を終了し21日からは残務整理と実測をなすとして31日にすべての発掘調査を終了した。

梅雨の後、日なり続々という悪い状態の中で発掘調査をしたのであるが、調査団・土地改良区関係者・南信土地改良事務所・地主の方・発掘調査に参加して下さって多くの方々のご協力とご配慮によって、無事調査を終了することができたことに、心から感謝の意を申し上げます。

#### 。発掘調査参加者（順不同）

高山よし子 木下文子 桃沢武 松崎おしげ 地田きく子 荒井晴雄 雨沢恵子 河崎よし江  
桃沢よ志子 有賀あさよ 北沢保雄 宮下金美 上山啓 戸田新次 太田喜代子 山本哲子  
小池千代子 宮下信彦 青木眞知子 小原ゆりえ 小原保秀芝

## 第Ⅱ章 遺跡の環境

### 第1節 遺跡の位置

原田遺跡の地理的位置は、東経137度56分5秒、北緯35度38分56秒に位置し、長野県上伊那郡中川村横前地籍にある。遺跡に至るには、国鉄飯田線七久保駅を下車し、東方に2.6km進んだ地点に所在する。原田遺跡は、中央アルプスに源を発する与田切川の押し出した飯島町七久保、本村横前と続く扇状地上に位置し、標高630~632mに広がる集落跡である。

同一扇状地面には繩文中期の遺跡である梨ノ木遺跡、弥生前期の刈谷原遺跡が知られており、又昨年発掘した溝林遺跡と一帯には広く遺物も分布しており埋蔵文化財の宝庫といった観がある。

本遺跡は昨年発掘調査した溝林遺跡の北方1,300mの一段低い地点にあり、天竜川東側の良く発達した河岸段丘、遠く南アルプスの連山を望むことができ背後には、中央アルプスの山々がそそり立つ姿を見ることができ景観の良い所である。



第1図 原田遺跡位置図 ( $S = \frac{1}{50000}$ )

## 第2節 地形及び地質

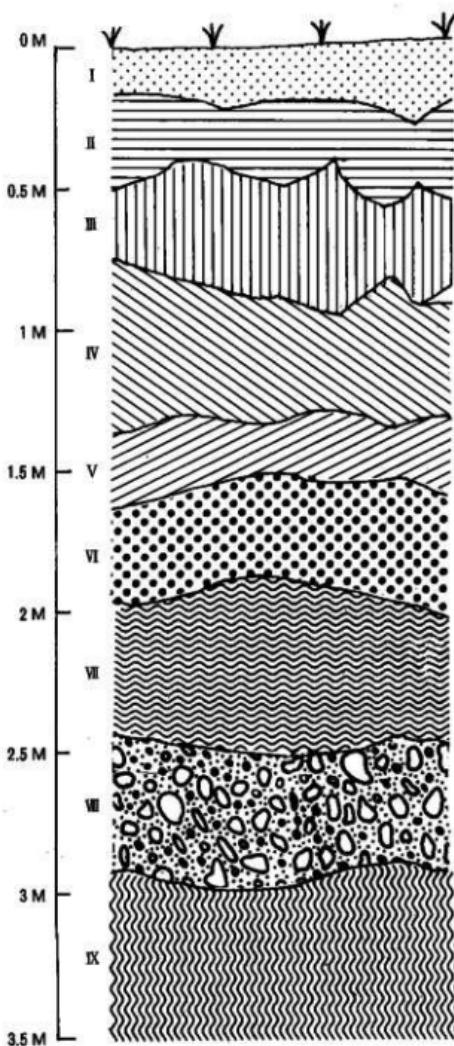
### 1) 地形

遺跡の位置する七久保・刈谷原扇状地面は、与田切川と片桐松川によって浸食され、田切地形の特徴をよく表わしている。遺跡の所在する原田は刈谷原段丘（657.4m）の東側一段底い（631.2m）に位置する。

### 2) 地質

原田遺跡の基盤は、古期火山灰層が砂礫層中に入り込んだ砂礫層からなり、その上に中期～新期ローム層が乗った地層から成る。当遺跡は刈谷原の南を流れる川によって南側は堆積土が多いため、最も良く保存されている北東の個所を選んで地層調査を行った。

- 第Ⅰ層 一 耕土
- 第Ⅱ層 一 耕土下の層(暗褐色)
- 第Ⅲ層 一 暗赤色層
- 第Ⅳ層 一 暗黄色層
- 第Ⅴ層 一 赤黄色層
- 第Ⅵ層 一 石質層
- 第Ⅶ層 一 砂礫層 (灰色)
- 第Ⅷ層 一 砂礫層 (黄色)
- 第Ⅸ層 一 玉石混り砂礫層



第2図 原田遺跡の層序 (1 : 20)

### 第3節 歴史的環境

原田遺跡のある中川村片桐地区は、分布調査の結果19箇所の遺跡の所在が確認されている。当遺跡付近の遺跡について簡単にふれたい。

1. 梨ノ木遺跡、溝林遺跡の北、刈谷原遺跡に南接する位置にあり、遺物は広範囲に散布している。繩文中期が主体で一部弥生後期の遺物も見つかっている。
2. 刈谷原遺跡、段丘縁部の一部発掘調査により弥生時代の条痕文系土器（刈谷原土器）が出土している。代表的な弥生前期の遺跡であるが、繩文中期の土偶の出土がみられ、梨ノ木遺跡との関係、遺跡の範囲は今後の調査をまたなければならない。
3. 茶堂遺跡、横林遺跡の東、段丘中央部に位置する繩文中期の遺跡。
4. 横山遺跡、溝林遺跡に南接する段丘縁部に位置し、一部は土地改良工事によって破壊されている。繩文中期及び弥生後期の遺跡。
5. 針ヶ平遺跡、横前部落に南接する針ヶ平に位置し、畑、山林となっているが、開墾入植の際の宅地改成により一部破壊されている。繩文中期及び弥生後期の遺物が採集されている。



第3図 原田遺跡付近遺跡分布図 ( $S = \frac{1}{20000}$ )

6. 溝林遺跡、昨年発掘調査した遺跡であって集落が非常に広大な遺跡であることが確認された。発見された遺構は縄文中期後葉の住居址34軒、土塀71、溝状遺構1等が発見された縄文中期の大形の集落址である。
7. 原田遺跡、本遺構は刈谷原という弥生式前期の遺跡の東側に位置している遺跡であるところより、刈谷原遺跡に関連を持っている遺跡ではないかと考え調査したところ、本報告書に示した成果のように弥生時代前期から中期初頭の遺跡で、刈谷原に続く時期として大変貴重な遺跡となつた。



第4図 遺跡付近の地形 発掘区 ( $\frac{1}{20000}$ )



第5図 遺構配図

## 第Ⅲ章 遺構と遺物

### 第1節 調査の概要

原田遺跡の発掘は、南信土地改良事務所と文化庁補助事業からの委託事業である。本調査は弥生時代初頭の刈谷原遺跡の近くに所在するところから、刈谷原遺跡との関連も十分考えられることもあり、予備調査では表面採集を綿密に実施した。さらに土地の方々から過去に遺物が発見された個所などを参考にして、発掘区域を決定した。

調査では発掘経費を節約するために水田の耕土のみを除土するためブルトーザを使用した。

調査区域内は東の水田をA地区、西の水田をB地区とした。調査グリッドはAB地区共通でA地区から東西にA, B, C, ……と5m毎に、南北の方向では1, 2, 3とやはり5m毎のグリッドを設定し調査をおこなった。

調査の結果、A地区に第4号住居址、第5号住居址、第6号住居址、第7号住居址と、焼土のみ検出の第8号址いずれも弥生時代中期初頭と考えられる住居址4軒と、炉址1基、溝状遺構1、集石址1、土塙等が発見された。9号址は住居址に準ずる遺構と考えられる。B地区からは第1号住居址、第2号住居址、第3号住居址の3軒A地区と同じ時期と考えられる3軒の住居址と、集石1基が発見された。

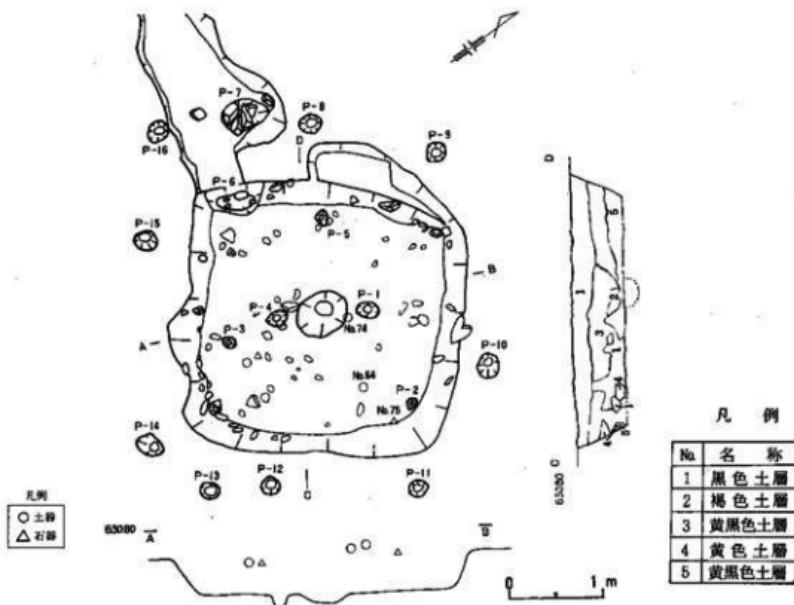
### 第2節 遺構と遺物

#### 1. 土器

今回の調査で出土した土器はかなり多い。しかし大方が細片でその性格を明らかにでき得ないものが多くあること、また、図上復原のできる資料の乏しいことも残念なことである。調査で確認された土器を1～X群にわけ以下述べることとする。I群1類土器縄文草創期、II群1類土器縄文早期、2類縄文前期、3類縄文中期、4類縄文後期、5類縄文晚期、III群1類弥生前期、2類弥生中期、3類弥生後期、IV群1類古墳時代、V群1類平安時代に分類した。

#### 2. 石器

今回の調査によって出土した石器は全部で63点である。土器の項でふれたように、縄文時代草創期、早期、前期、後期、の土器が出土しているが、量的に非常に少なく石器はⅦ、Ⅷ群に伴出すると考えてよいと思われる。こうした状況から一括して報告することにした。その内訳は、打製石斧33点（内完成品8点、破片25点）磨製石斧2点（内1点は破片）、石錐1、横刃形石器7、石鎌（有茎3無茎1）ドリル1（破片）、敲打器1、磨石4、ナイフ形石器2、スクレバー8、等が出土した。



第6図 第1号住居址実測図

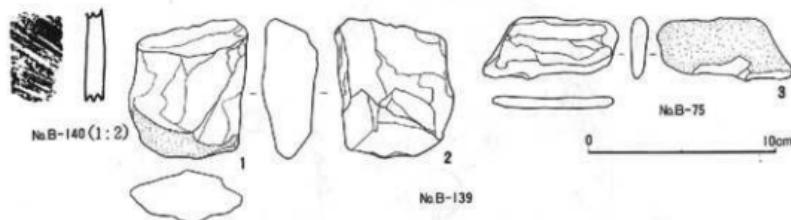
#### 第1号住居址（第6図 図版1）

造構はB地区では北側に位置し、南に第2号住居址と隣接する。住居址は水田の耕土を除土しわざかに掘り下げる。礫混りローム層を掘り込んで床面を作っているが、やや南西に傾斜している。床面は礫混りの叩床で、第1号住居址のプランは東西2.82m、南北2.95mの隅丸方形、壁の高さは南壁でローム切り込み面から25cm。壁面にこぶし大の自然が露出しているが特別な施設はないようである。主柱穴は壁にそってP-2、P-6、P-17、P-18の4住穴と考えられる。炉址は住居址のはば中央にあり、東西50cm、南北57cm円形、深さ13.1cm、炉址内には焼土が充満した地焼炉である。炉址より北10cm P-1と南12cm P-4は炉址に対して対象の位置に設けられたピットで、炉址に関係したピットではないかと言う意見もある。また直接建築に関係があると言う考え方もあるピットである。壁外のピットはP-7～P-16まで9箇検出され、いずれも壁から30～50cmの距離にあり、ピットとピットの間隔は1m～2mにあるところから、住居址に直接関係したピットと考えられる。

#### 遺物（第7図）

住居内から出土した土器は3片のみである。1は出土番号B-140で条痕文をもつもので東海地方

との関連を考える上で重要なものである。条痕はほとんど貝殻腹縁によるもので斜走するものが一般である。胎土には多い少ないは別として大粒なる長石が含まれている。色調は褐色である。そのほかの2片は無文である。3片とも時期はⅢ群2類である。2は硬砂岩の打製石斧、3は横刃形石器である。(和田)



第7図 1号住居址出土遺物(図示)

表 第1号住居址ピット一覧表

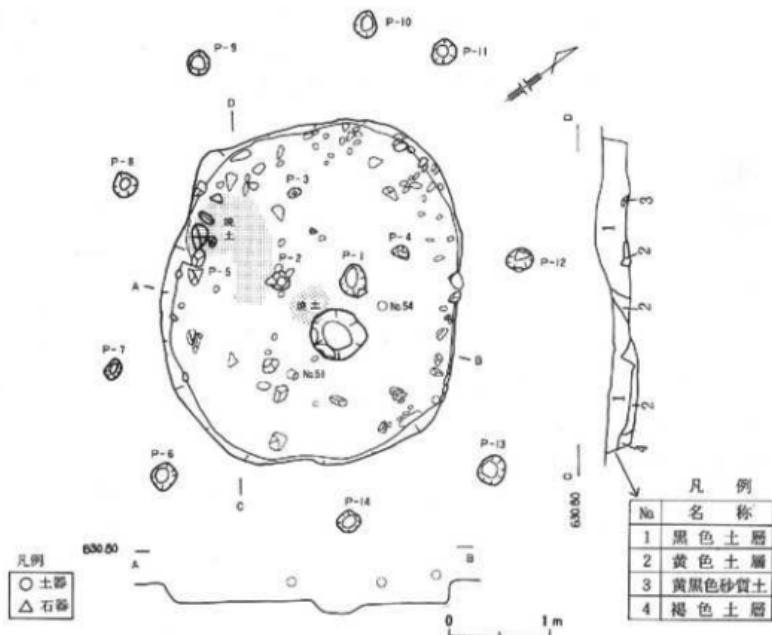
番号	規 模 cm	深さ cm	形 状	備 考	番号	規 模 cm	深さ cm	形 状	備 考
1	22 × 15	8	楕円形	住居址内	10	28 × 20	15	楕円形	住居外
2	13 × 12	5	"	"	11	18 × 20	8	"	"
3	15 × 12	5	"	"	12	17 × 19	7	"	"
4	15 × 20	7	"	"	13	22 × 18	5	"	"
5	13 × 15	5	"	"	14	30 × 20	14	"	"
6	45 × 25	5	"	"	15	25 × 20	10	"	"
7	50 × 30	12	"	住居外	16	25 × 22	12	"	"
8	25 × 22	7	"	"	17	14 × 10	5	"	住居内
9	20 × 23	7	"	"	18	14 × 12	6	"	"

第2号住居址(第8図 図版2図)

本住居址はB地区第1号住居址と第3号住居址の中間に位置している住居址である。プランは東西3m, 南北3.40m, ロームに切り込まれた深さ25~30cmをはかる。壁の平均こう配は30度内外。壁面には頭大からこぶし大の自然石が露出している。床面は堅く踏み固められ良好である。住居内の柱穴と思われるものはP-4のみで、他にそれらしきものは見当らない。P-1, P-2は第1号住居址発見の炉址をはさんだピットと同様のものである。炉址は、P-1とP-2との東側に地焼炉があり東西55×50cmの炉石をもたない炉址が検出された。壁外のピットは壁に沿って50~90cm離れて1~2mの間隔にP-6~P-14まで9箇検出された。この状態はまったく、第1号住居址の壁外ピットと同様である。

#### 遺物(第9図)

出土番号B-58は無文土器の小破片でよくわからないがⅡ群2類土器と思われる。そのほか2片陶器片(江戸時代)が落ち込んで発見された。(和田)



第8図 第2号住宅址実測図

第2号住宅址ピット一覧表

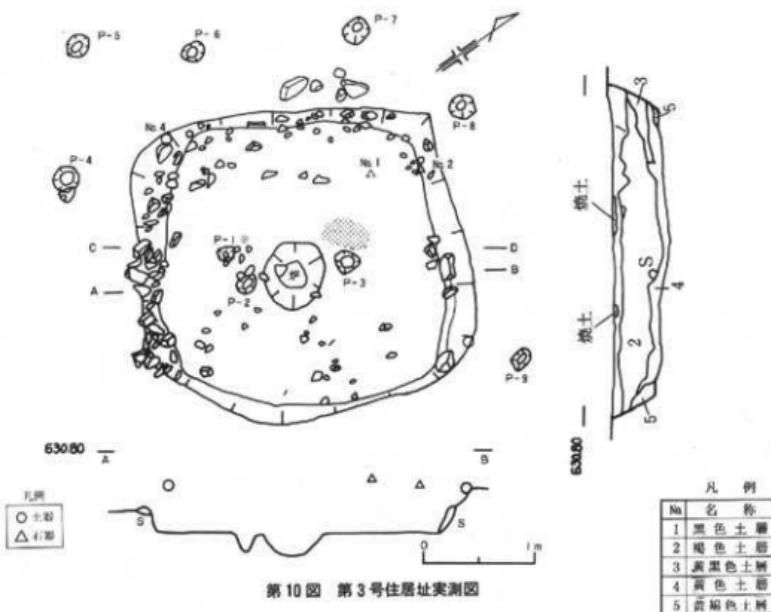
番号	規 模	深さ	形 状	備 考	番号	規 模	深さ	形 状	備 考
1	25×30	10	楕円形	住居内	8	25×25	10	楕円形	住居外
2	18×20	8	"	"	9	22×25	8	"	"
3	10×8	5	"	"	10	20×25	12	"	"
4	20×10	7	"	"	11	25×25	10	"	"
5	25×20	6	"	住居外	12	30×20	10	"	"
6	25×20	10	"	"	13	30×25	9	"	"
7	20×15	"	"	"					

第3号住居址 (第10図 図版2)

本住居址は第2号住居址の南側に発見された住居址である。プランは、東西2.8南北3m。隅丸方形である。ローム層から40~50cm掘り込んだ高さに床面がある。壁面には頭大からこぶし大までの自然石が石積のような状態で露出している。壁のこうばいは30~32度内外である。床面はほぼ平らで良好である。炉址は住居の中央やや南寄りにあり、長経60cm、短経50cm深さ20cm楕円形、炉の内部は焼土が厚く堆積していた。住居内には柱穴らしいピットは検出されなかったが、炉址周辺にP-1、P-2、P-3は、第1号、第2号住居址出土のものと同様な性格をもったものであろう。(和田)



第9図 第2号住居址出土土器

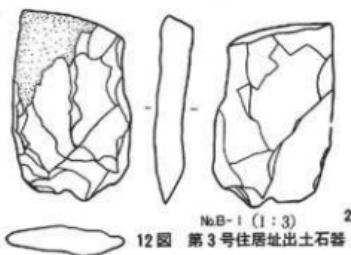


遺物（第11、12図）

第3号住居内から出土した土器は少なく、1は鉢状器具による波線文土器で第Ⅲ群2類に属する土器と考えられる。2は硬砂岩製の短冊形打製石斧で、頭部を欠いている。



第11図 第3号住居址出土土器

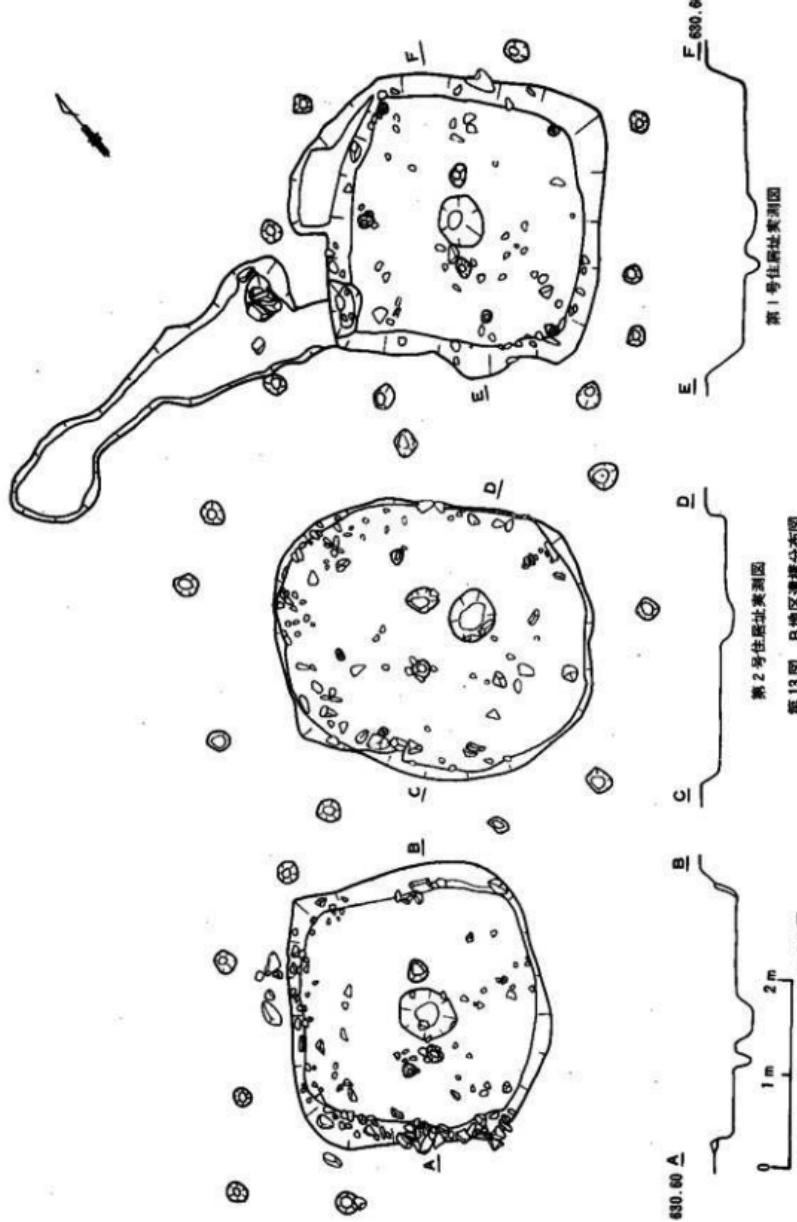


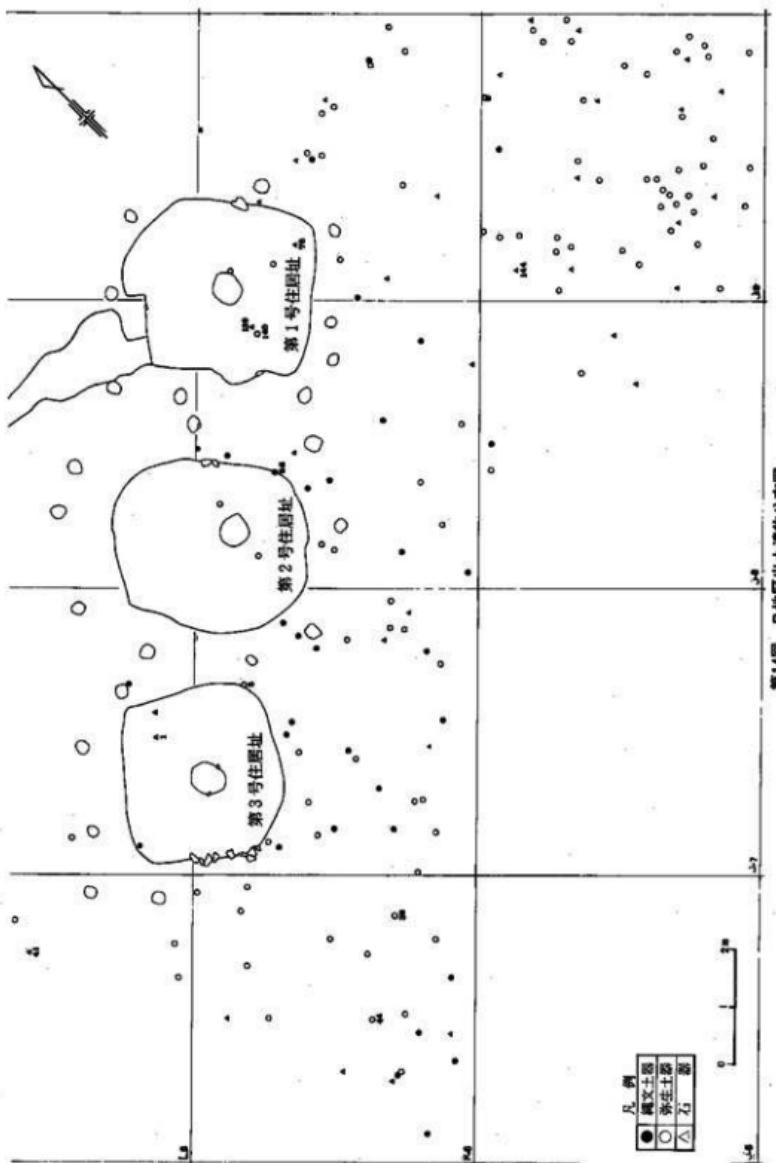
第12図 第3号住居址出土石器

第3号住居址ピット一覧表

番号	規 模	深 さ	形 状	備 考
1	13×15	8	椭円形	住居内
2	18×15	10	"	"
3	25×20	10	"	"
4	23×25	10	"	住居外
5	20×20	8	"	"

番号	規 模	深 さ	形 状	備 考
6	20×20	8	椭円形	住居外
7	25×20	10	"	"
8	27×23	10	"	"
9	20×15	8	"	"





第14圖 D地区出土遺物分布図

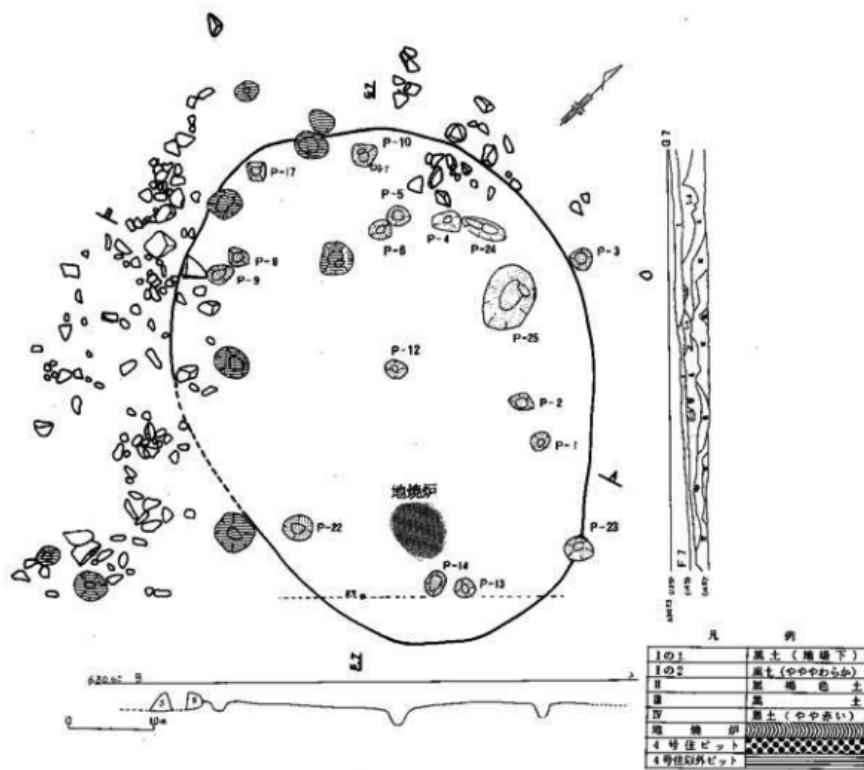
第4号住居址（第15図 図版3）

本遺構は、F-6, F-7グリッドにまたがる遺構で、地形的には凹地の堆積土である黒色土と褐色層に構築されたものである。遺構の規模は黒色土層中にあるため、未確認の部分もあるが、本遺構からは出土遺物が多いことと、床面が貼床で、その一部が残っており柱穴や焼土の位置から住居址と判断された。調査した結果では第5号住居址を拡張するため10cmほど埋め立てて、その上に本住居址を構築したものと思われる。本址の柱穴としては、第15図に示すとくP-1, 2, 3, 4, 5, 6, 8, 9, 10, 12, 14, 17, 22, 23が考えられ、分類した柱穴の規模から推定し、P-12を中心として、P-1, 2, P-5, 6, P-8, 9, P-13, 14及びP-22（単独）のごとく柱穴が2個ずつ並列になったものを内として、主柱穴をP-2, 5, 9, 13, 22と考え、P-1, 6, 8, 14をその支柱又は、建替等による柱穴ではないかと思われる。外廻りのP-3, 10, 17, 23を壁付近の壁柱穴と考え、東側のプランの一部が破壊により不明なところもあるが、本址の規模は東西約6.0m前後、南北約5.0m前後の楕円形をなす住居址と推測される。炉址は中央やや東寄りに位置し、60×74cmの焼土が約10cmほど堆積し、焼土中からも土器片が検出された。床面は東西にあたる全体の三分の一ほどが貼床として比較的めりりょうに残っているが、東半分は黒色又は黒褐色土層が軟弱であり、柱穴の周囲が堅く残っていた。また、P-4, P-24は柱穴様の落ち込みに見えたが、表面は黄褐色砂利混りの5cmほどどの埋め立てであるが、この貼り床の下は黒土で、そのひろがりは不明である。その他、P-7, 11, 15, 16, 18, 19, 20, 21, 26は柱穴の太さから、また、深さからまったく別の遺構の柱穴ではないだろうか。未確認のまま終り今後の研究にまつこととした。（小木曾）

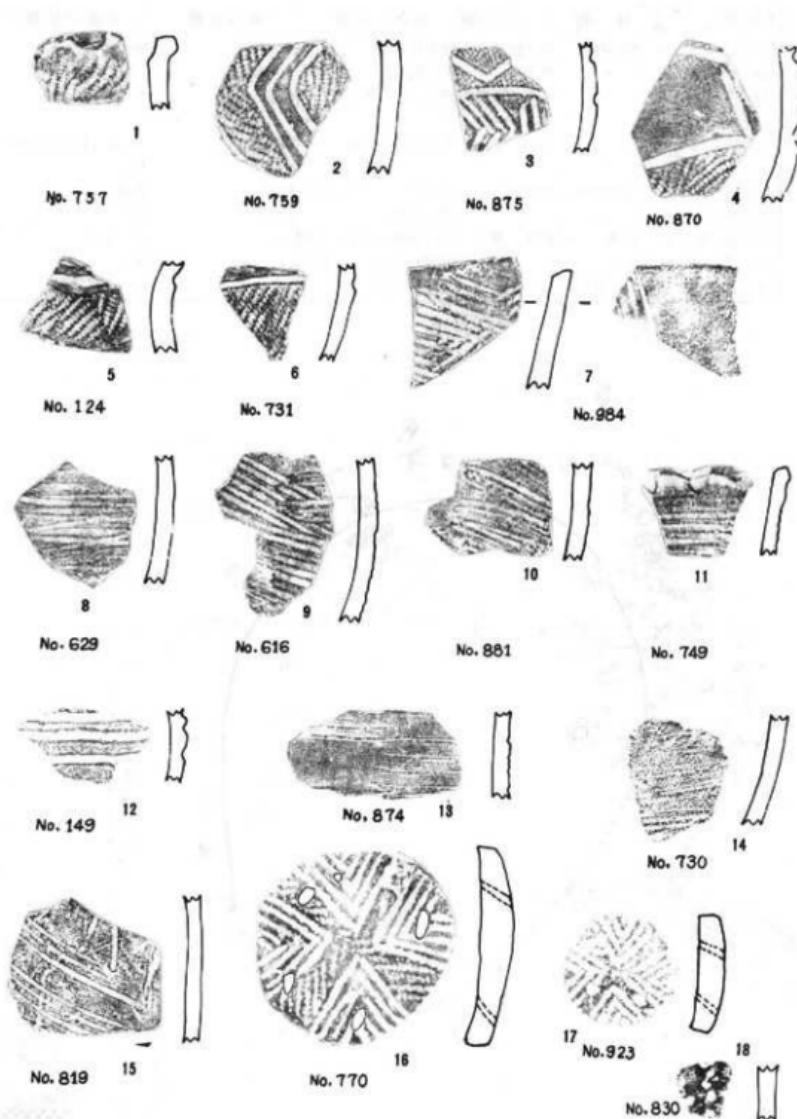
第4号住居址ピット一覧表

番号	径 cm	深さ cm	種類	ピットの土層	底部の状態	壁の状態	表面の状態
1	22×24	20	4号住柱穴	黒土	平でやゝ丸味。固い	黒色で固い	縁の周りは黒く固い
2	24×26	20	"	"	"	"	"
3	27×28	18	"	褐色土	5cm大石3個	固く茶褐色小石混り	固い
4	25×35	40	ピット	埋土貼床	くさび形	固い	貼床の上に埋込む
5	22×23	32	4号住柱穴	褐色土	やゝ平で、7cm大石3個	褐色土で固い	固い
6	20×25	10	"	"	平でやゝ丸味	やゝ黒色で固い	"
7	38×38	33	別の柱穴	黒褐色土	やゝななめで石あり	固い	"
8	19×20	6	4号住柱穴	黒褐色砂利混	穴の先が細くなっている	"	"
9	22×22	16	"	"	やゝ平	"	"
10	24×26	23	"	黒褐色ローム	上部貼下ロームに、石大小2個	"	"
11	33×40	23	別の柱穴	埋土、黒褐色	小石砂利混り	ざらざら	ざらざら
12	25×25	21	4号住柱穴	黒褐色土	やゝ平で固い	固い	固い
13	22×23	17	"	"	"	"	"
14	22×23	15	"	"	"	"	"
15	40×40	23	別の柱穴	"	平でやゝ固い	やゝ軟弱	普通
16	32×36	17	"	褐色土	舟底で砂利混り	"	"
17	26×27	26	4号住柱穴	貼床（埋土）	上部10cm下ローム、貼床下ローム	上部は固く下部軟弱	固く、貼土

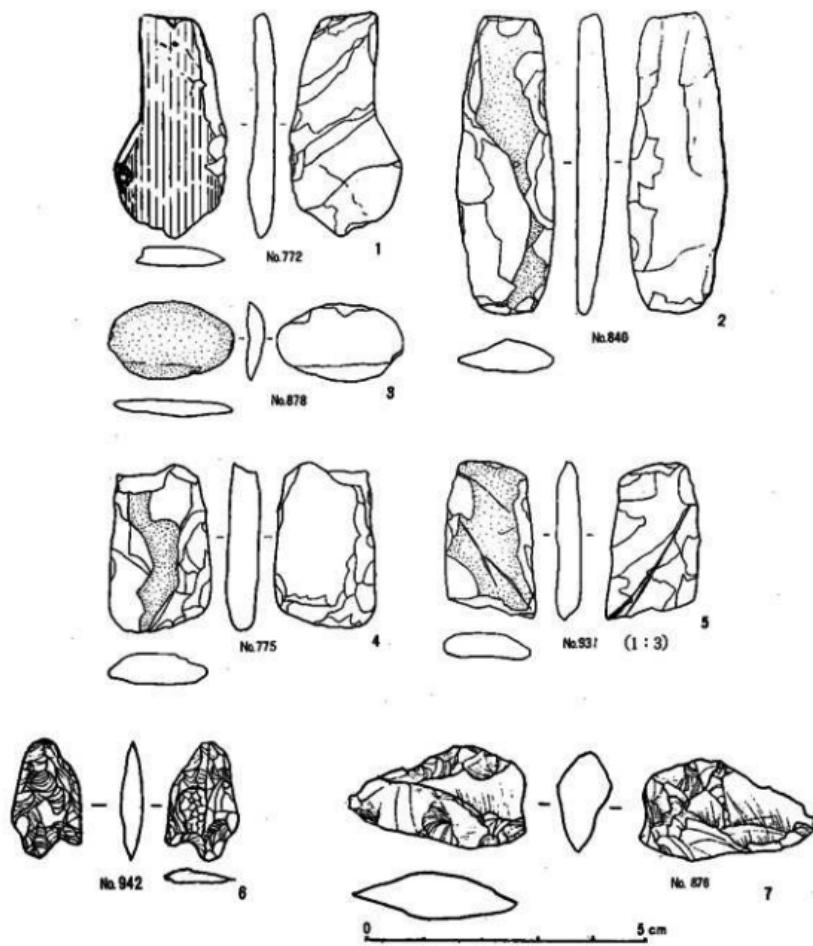
番号	径 cm	深さ cm	種類	ピットの上層	底部の状態	壁の状態	表面の状態
18	32×32	33	別の柱穴	黒土砂混り	砂混り	やゝ固め	軟弱
19	22×22	11	“	黒土	平で石ごつ	やゝ軟らか	“
20	23×23	10	“	砂混り黄褐色	舟底でざらざらしている	ざらざら	ざらざら
21	25×29	16	“	黒土	平らでやゝ丸味	固い黒土	固い10,11の上10cmに あり
22	26×30	27	4号住柱穴	黒褐色土	平らでロームでとまる	軟弱	普通
23	26×30	30	“	“	平らで固い	固い	固い
24	22×60	19	周溝の一部	貼床、埋土	10cm下部は黒土で不明	“	ざらざら
25	80×60	12	土塙	ローム	砂混りのロームで固い	“	固い
26	22×23	18	別の柱穴	“	やゝ平で固い	“	“



第15図 第4号住居址実測図



第16図 第4号住居址遺物 (1:2)



第17図 4号住居址出土石器

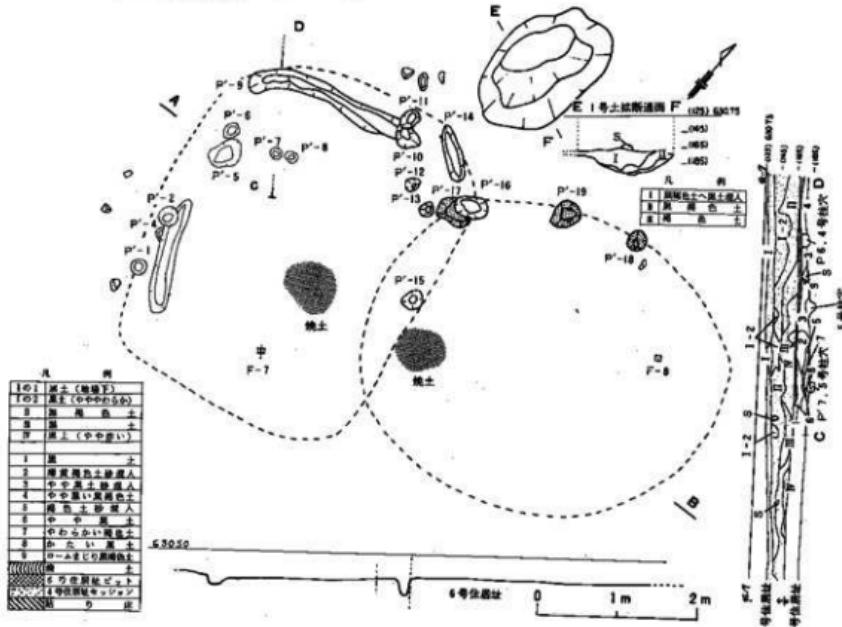
遺物（第16図）

土器、1は斜縞文の變形土器の口縫部破片、晩期Ⅱ群5類に比定される土器、2は地文が縞文で「くの字」の沈線が3本平行に施された變形土器の底部破片で1の土器と同時期のものと思われる。3は縞文が細かく鑿状器具による「くの字」の沈線文と磨消した無文地に同じ施文具で綾杉状に施文した土器と思われる。5と6は4と同様の土器、7は無文のある東海地方と関連をもつ貝殻条痕文土器

で、Ⅲ群2類に比定されるもの、8は貝殻腹縁にて横位に施文した条痕文土器、9,10は横位は斜に一部交差した貝殻条痕文土器、11は口縁外側に圧痕のいれられた凸帯がみられる条痕文土器で、いわゆる続水神平式に比定されるⅣ群2類である。12は鉈状器具による沈線文Ⅲ群2類に入れられるものではなかろうか。13, 14Ⅲ群2類の条痕文土器と異なって、いわゆる沈線による文様表出技法を示すものである。Ⅱ群5類との区別は必らずしも明確とはいえない。15は竹管状器具により施文したと思われる平行沈線文が綾杉状に施文されたⅢ群2類に属する土器、16は長径7.3短径7.2cm、厚さ1.0cmほぼ円形、裏面は箆による調整がうかがわれる。色調は灰褐色、焼成は良好、表面は地文が繩文でその上を綾杉状の沈線で4等分した形の文様が施されている。器面には直径3mmの吊穴が二対斜にうがたれている土製装身具である。17は16と大きさこそ異なれ同一技法で作られたものである。こうした例は埴科屋代雨宮県唐崎弥生式中期の初めの遺跡より出土している。18は竹管の先で連続して丸を押した形の施文である。弥生式初頭の土器にはしばしば見受けられる。

#### 石器（第17図）

1は自然面をもつもので、短冊形硬砂岩製の打製石斧。2は自然面をわずかに残した緑色岩製の短冊形打製石斧。3は自然面をもつ硬砂岩の横刃形石器。4は自然面を一部にのこし硬砂岩の短冊形打製石斧破片。5は自然面をもつ硬砂岩の短冊形打製石斧破片。6は黒曜石製の有茎石鏃、脚部が欠損している。7は黒曜石製のスクレバー。



### 第5号住居址（第18図、図版3）

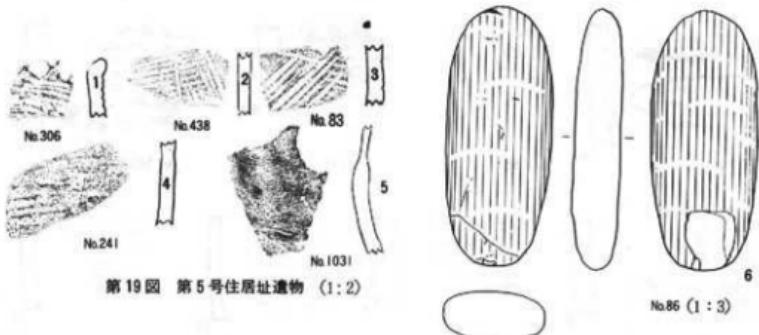
本址は第4号住居址の約10cm下に重なり、断面図第18図に示すごとく本址との区分が明確で、プランは不明確ながら住居址のおおよその規模は南北約3.6m、東西約4.4m前後が推定され、プランは隅丸方形と思われる。ピットはP 1, 2, 4, 5, 6, 7, 8, 10, 11, 12, 13, 15, 16の13個検出されたが、そのうち主柱穴と考えられるのはP 1, P 6, P 10, P 15で、東側にもあったと思われるが黒土中で検出できなかつた。また、周溝と思われるものにP 3, 5, 9, 14が検出された。炉は地床炉で、中央やや東寄りに位置しており、第4号址と同位置で使用したものと考えられる。床面は西側半分はローム又はロームの砂利混りの黄褐色土になっていて比較的良好であったが、東側半分は褐色土又は黒褐色土であつて、床面としては、やや軟弱であった。（小木曾）

### 遺物（第19図）

土器、1は口縁外側に圧痕をみる凸帯が存在し、その下に横位に条痕を施した壺形土器の破片である。水神平1式に比定されよう。2・3は条痕が横位または横縦に施された土器で庄之畠の古いところに位置されるものと思われる。4は浅い条痕土器、5は壺形土器の口縁部に近い部分で器面はナデによる整形痕がうかがえる土器で縄文前期初頭の東海系の土器ではなかろうか。

### 石器（第19図）

6は緑色岩の石斧形の自然石を一部加工して作った短冊形石器。石器の両端には敲打した痕が見うけられる石器である。



第19図 第5号住居址遺物 (1:2)

### 第6号住居址（第18図、図版3）

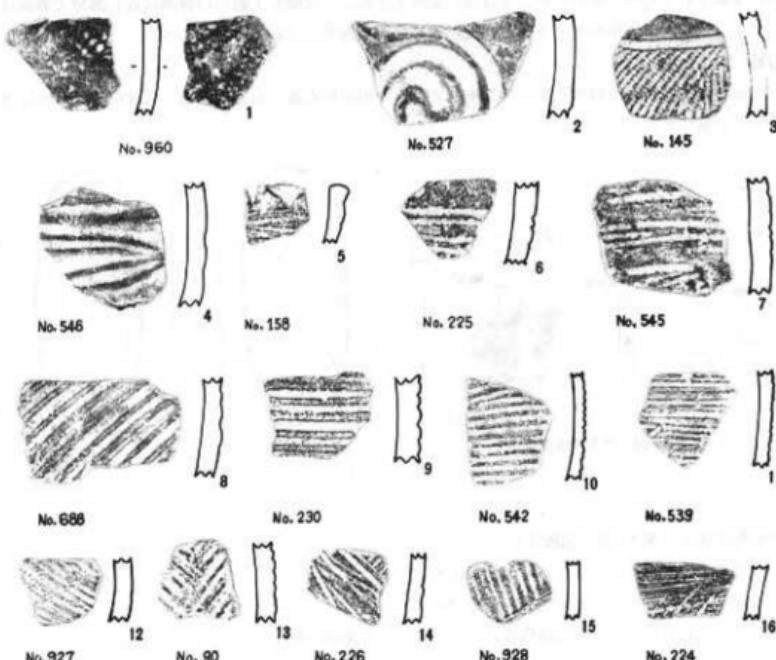
本址は、4号住居址の10cm程下の黒褐色土層又は黒土層にあって、5号住居址に南側の一部分を切られたものと思われるが、大半は耕作等によって破成され造構は検出されなかつたが曲線上に並ぶP17, P19, P18は本址の柱穴であると思われ、P17は5号址のP16に切られている又P18は柱穴の底に敷石があり、壁にも石がつめられていて、柱穴の向きがやや東に傾斜していた。焼土が中央南寄りに僅かであるが65cm×50cmの範囲で、1cm～2cmの厚さで検出されたが恐らく本址の地床炉であろう

と推定できよう。東側は破戒に終ったが、北側は時間切れとなって未調査である。柱穴及び炉の位置から本址は東西約3.9m前後、南北約4.6m前後の規模をもつ梢円形のプランを呈する住居址であると想像できよう。床面は柱穴の周囲を除いてはやや軟弱で黒褐色となっていた。（小木曾）

## 遺物

### 土器（第20図）

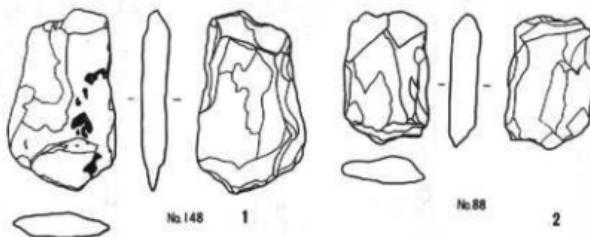
1は出土番号960、表裏に回転繩文が施されたいわゆる椎ノ湖II式とされている土器、文様の摩滅がはなはだしくわずかに残る程度。器厚は6mm、胎土に石英粒と金雲母を含む、色調灰褐色、焼成良好。長野県では上伊那宮田村向山遺跡、下伊那郡高森町増野川子石、南佐久郡北相木村原岩陰遺跡等は著名である。2は沈線による渦巻が施された繩文中期末葉の土器。3は磨消繩文土器、繩文晩期と考えられる。4は口縁部の凸帯に指頭痕が施され頭部以下は条痕文の東海系櫛王式の新しい方の土器。5は竹管文が施された繩文後期の土器と考えられる。6～13は貝殻条痕土器で庄之烟式に比定されるものと思われる。14・15・16は条線文土器で庄之烟式に比定されるものであろう。



第20図 第6号住居址出土土器 (1:2)

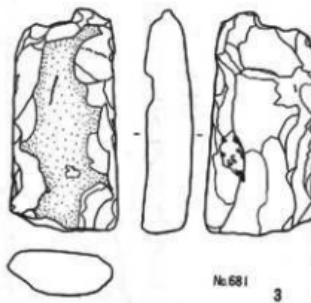
石器（第 21 図）

1 は自然面をわずかに残し刃部に使用痕が認められる緑泥変岩の換形打製石斧。2 は表面にわずかではあるが自然面を残す緑泥変岩製の短冊形打製石斧破片。3 は表面中央に自然面を残した青味のある硬砂岩製短冊形打製石斧である。

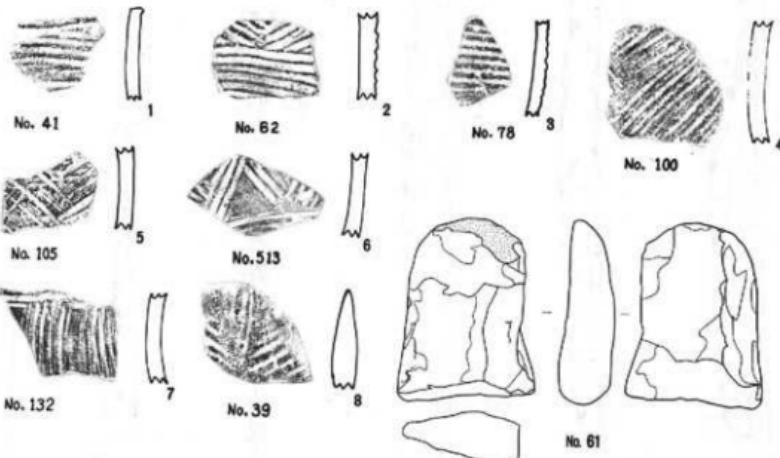


第 7 号住居址（第 23 図、図版 4）

本住居址は、D 8 グリッドの地場下ローム層に検出されたが、地形的にやや小高い場に当たるため、田普請等の際に床面を破壊され約 10cm 前後床面から削り取られたものと思われ、地場を取り除くと即ローム層になって立證すべき遺物は少く、柱穴内及び凹



第 21 図 第 6 号住居址出土石器(1:3)



第 24 図 第 7 号住居址出土土器(1:2)

第 25 図 第 7 号住居址出土石器(1:3)

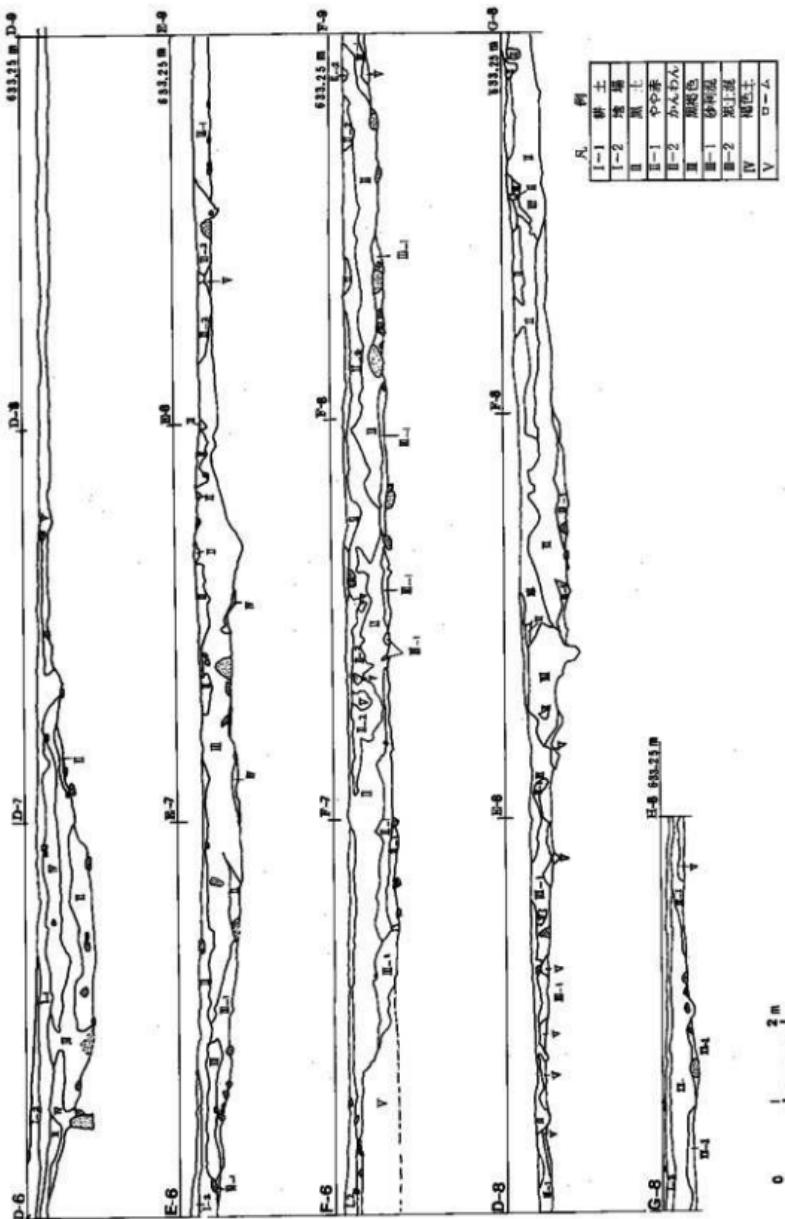
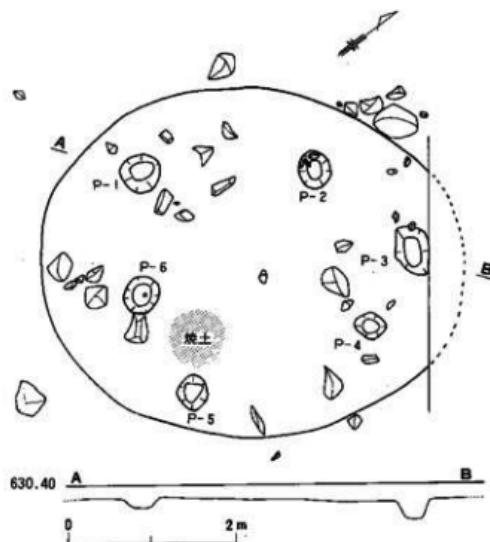


图 22 图示 A 地区地质断面图

み等より出土したもの以外  
は地場土から出土したもの  
である。

住居址の推測出来得る規  
模の範囲は凡そ東西約4.1  
m前後、南北約5.0m前後  
の楕円形のプランを呈する  
ものと思われる。ピットは  
ローム層に切り込んで作ら  
れ6個所検出され、P-1, 2,  
3, 4, 5, 6であった。この内  
で主柱穴と思われるものは、  
P-1, 2, 4, 5の4ヶで、比較  
的大く、上部の破壊により  
浅くなっている。底は舟底  
形をなしている。炉は中央  
やや南東寄りに位置し、ロ  
ーム層を掘り込んで作ら  
れ、直径75×76cm、深さ25  
cmの円形で、炉の中には焼  
土が充満していた。(小木曾)



第23図 第7号住居址実測図

#### 遺物

##### 土器 (第24図)

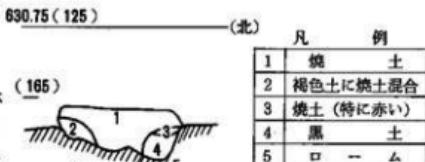
1・3は、横位の貝殻腹縁による条痕文深鉢  
形土器の脚部破片で、Ⅲ群1類に属するもの。2  
～5、7、8は条痕文はほとんど貝殻腹縁によ  
るもので、横ないし斜に施されたⅢ群1類土器  
である。6は波線による横または綾杉文でⅢ  
群2類庄之畠式土器である。

##### 石器 (第25図)

硬砂岩の楔形打石斧である。

#### 第8号址 (炉址)

本炉址は、C9グリッドのローム層上に検出され、規模は約50cm×55cmの円形の範囲に焼土があり、  
厚さ約10cm程度であった。焼土は土手の曲り角附近に当り、土手の高さは約1m程度になっていた。出土  
遺物は、土手を取り除く際に焼土の南側附近の黒土中より、大形打製石斧2、及び土器片を、又ロー-



第26図 第7号住居址炉断面図 (1.90)

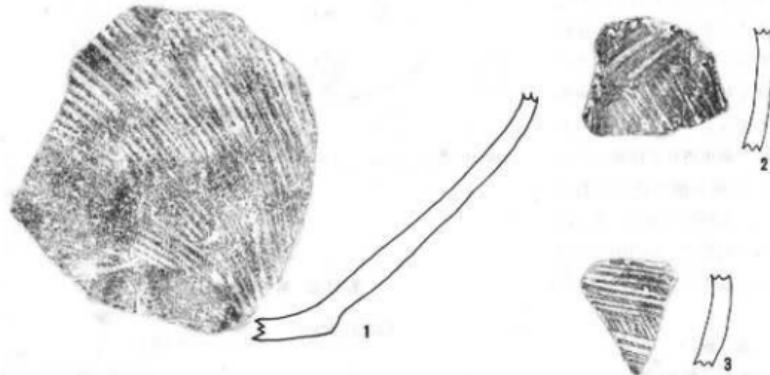
ム層直上褐色土層より数点の土器片を検出した。焼土の周囲は開田の際の破壊も考えられるが、焼土に関連性をもつ他の遺構は発見できなかった。

結論として、本址は住居址につながるものか、又は単独の焚火の跡と考えるか否かは、後の研究にゆずることとしても、焼土の北側近くには後述する溝状遺構が通っている事から、本址は単なる焚火の跡とは云いがたく、溝と関係をもつ者の達の使った焚火の跡とも思われる。(小木曾)

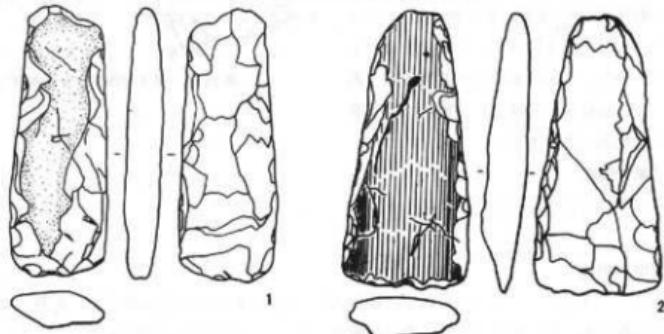
#### 遺物

##### 土器 (第 27 図)

1 は条痕文の壺形土器の底部である。底部の開く角度から見て相当大形の壺形土器と思われる。胎土に石英粒を含み色調赤褐色焼成良好な土器でⅢ群 2 類に比定されるものと思われる。2 は横斜に条痕が施文された深鉢形土器の胴部破片と考えられる。胎土に多量の石英粒を含み焼成良好のⅢ群 2 類の土器、3 は条痕が横位と斜位に施されたⅢ群 2 類に見受けられる土器。



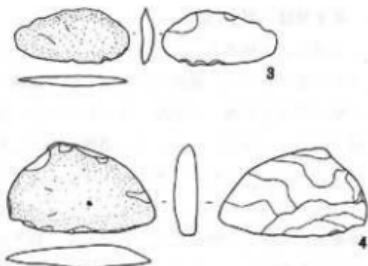
第 27 図 第 8 号址出土土器 (1 : 2)



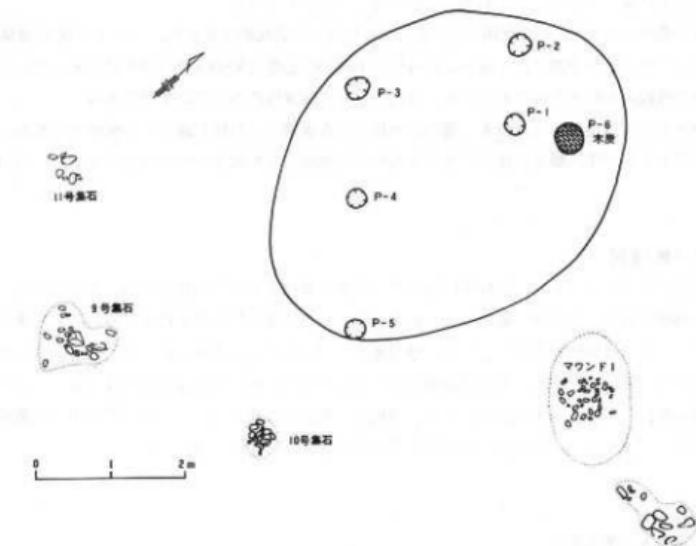
第 28 図 第 8 号址出土石器 (1 : 4)

### 石器（第 28、29 図）

1 は長径 20.5 cm、短径 6.6 cm、厚さ 2.6 cm、重さ 565 g、片面に自然面を残す短冊形硬砂器の大形打製石斧、  
2 は長径 20.6 cm、短径 8.0 cm、厚さ 2.2 cm、重さ 670 g、片面に自然面を残し、刃部に使用痕のある換形硬砂岩の大形打製石斧である。3、4 は表面に自然面を残す硬砂岩の横刃形石器。



第 29 図 第 8 号址出土石器 (1 : 3)



第 30 図 第 9 号址実測図

### 遺物（第 31 図）

1 は深鉢形土器破片、胎土に  
石英粉を含み焼成良好な条痕土器、  
2 は 1 と同じ深鉢形土器の  
破片、条痕文Ⅲ群 2 類土器。



第 31 図 第 9 号址出土遺物 (1 : 2)

### 第9号址（第30図）

本址は、発掘調査のA地区の最北西部に当り、H 9グリッドを主体として、H 8, G 8, G 9グリッドにまたがって、地場下に検出された遺構で、開田の際、床面まで削り取られ、その上に約10cm位の厚みに赤土を練って地場が作られてある。遺構の周囲は砂礫混りの固い層で黄色をなしてて、地場とほとんど接合しているが、遺構の検出された部分は、地場と床面らしき面との間にわずか1~3cm位の黒土が見られた。黒土下の床面と思われる面はタタキになっていて固く、黒褐色をなし、床面ではないかと思われた。壁は全く認められなかったが、西北部に於ては、黒褐色の固い面と、黄色の砂礫層との区分が明確に出ており、その線を追ってゆくと、おおよそ、南北約4m前後、東西約5.3m前後を測定できる規模の床面を検出、プランは椿円形を呈するものと思われる。ピットは5個検出され、P 1, P 2, P 3, P 4, P 5で直径は13cm~20cmで、深さは18cm~23cmあり柱穴と思われる。

P 1の北側に5~8cm位の深さで直径約30cmの円形状の落ち込みが検出され、その中からこまかい木炭が黒土に混って出土した。おそらく炉の跡ではないだろうか。

本址の東側に南北1.3m、東西1.7m位の小砂利混りの黄褐色土をした、マウンド状の遺構とを検出した。マウンドの上部には3cmから10cm位の小礫が中心部に約80cm位の円形状に入っていた。時間の都合で外観のみにとどめておいたが、時代決定並に関連性については不詳である。

遺物としては、遺構外では数多く遺物が発見され表裏織文、有柄石鏃などが検出されたが、床面には僅かであるが、庄之烟式に比定できる土器片3と黒曜石2が検出されたのみであった。（小木曾）

### 土塙（第18図）

本塙は、F 7グリッド内、5号住居址北西の位置に発見された。南北188cm、東西120cm、深さ31cm位の規模を有し、表土面（地場）より約45cm位下った砂礫混りの黄褐色土を掘り込んで構築され、平面プランはほぼ椿円形を呈している。壁の縁はざらざらであったが、底に近くなるにつれロームになり固くなっていた。壁面の傾斜は東側がなだらかであり、南、西側は内湾が強くなっていた。覆土は3層に別れ、黒褐色へ黒土混入の黒土、黒褐色、褐色土の順になっていた。覆土中には遺物が発見されなかったことから、本土塙の時代決定並に関連性については不詳である。

### 集石遺構A（第5図）

本遺構は、グリッドD 6, E 6, F 6, G 6にまたがって、北向き斜面（最大比高差70cm位）に最大幅南北で4.5m、東西に長く延びて約17mの規模で検出された。こぶし大から大きなものは直径約30cm位までのさまざまな円礫の集石で低地に向って黒土と共に流れ込んでいるかの様にローム層上にまで埋っていた。又一見河原のごときと違つて凹地にゴロ石を黒土と共に投げ入れたとも考えられ、集石の中にはすべて黒土が充満し、個々の石が浮き上った形になっているものが多く見られた。

遺物は集石の中より櫻王及庄之烟に比定出来ると思われる土器片が多数散在しており、特にD 6グリッドから集石の末端北側に表裏織文土器片1、及び集石の中間と思われる地点に元豐通宝1が検出された。

#### 集石遺構B（第5図）

本遺構は、遺構Aの対面に当るD7グリッドに検出され、ゆるやかな南向き斜面になっていて、遺構Aとは同様に見えて、大きな石はローム層にくい込んでおり、その上にこぶし大から20cm大の円礫が重なり、集石中には黒土が充満していた。集石の状態では埋立する為に投げ込まれた様にも考えられる。遺物の出土は比較的多く、水に比定される種類のものは少量で、主として櫛王、庄ノ烟に比定出来る土器片が約半々に出土し、1片であるが表裏繩文土器片も検出された。

本遺構の西側には、東西約3.5m、南北約2.5mの隅丸方形式に近いプランのロームマウンド状の遺構が検出され、中央部がやや高くなっている、その周囲には10cmから20cm大の石がプランの線に沿って埋められており、特に北側には20cm大から30cm位の石が直列に並んでいた。（マウンド2）時間的制約により本遺構の調査は不可能となり外観だけにとどめた。

#### 集石遺構C（第5図）

本遺構は、B10、C10グリッドにまたがり検出された。集石は北西から南東の方向に帯状になって延びており、最大幅東西約8mで南及北に延びているものと思われる。集石の置かれた地点はやや凹地になっていて、こぶし大から直径20cm位の大小さまざまな円礫を、落ち込状の底い所には重なり、浅い所にはまばらに集石され、一種の暗渠施設ではないかと思われる。集石の中には黒土で埋められ、石の表面は凸凹であるが、おおむね平らになっていた。遺構の中には遺物は検出されなかったが、地場及地場下黒土中からは若干の遺物が出土しているが、本遺構の時代決定には何等関係ないものと思われる。

#### 集石遺構D（第5図）

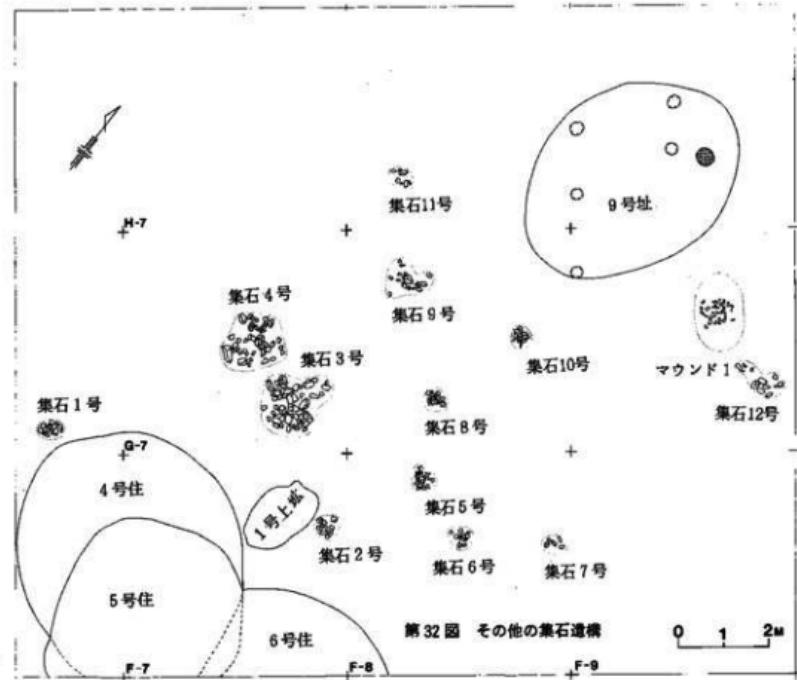
本遺構は、A10グリッドに検出された集石遺構で、地場下約25cm位下った黒褐色土を南北に約60cmの幅に直線に切り込んで、約10cm大の円礫をローム層までつめ込んだ形になっており、集石の中には黒土で埋っていた。遺物の出土はなく、恐らく暗渠排水の跡ではないかと思われる。

本遺構の東側には、ローム層を掘り込み、その中に集石が検出され、規模は直径約1.2mの円形をなし、集石の中には黒土が埋っていた。外観では集石土塗と思われ、塗の上部に一部赤味を呈し、焼石となっていた。時間的に内部調査が出来なかった為、時代決定並に関連性については不詳である。

#### その他の集石遺構（第32図）

表第32図に示すごとく、集石3,4,13号を除いて、1,2,5,6,7,8,9,10,11,12はその規模から見て全く同種類のものと考えられる。特に注目すべき点はレベルが126.5cmから142.5cmあり、この10個の集石のうちでも、ローム層にあるものは5号から12号の8ヶ所で、他の1,2号集石はローム層より37cm上った黒土の上に検出された。これらの10ヶの集石は、地場を掘り下げていく際に検出された事から地場と何等かの関係があるものと考えられる。地場上のレベルは凡そ平均で130cm前後、地場下が140cm前後で地場の厚みは約10cm程と見れば集石は大方地場に入るものと思われる。開田は大正時代に行われたと云われていて生存者がない為に不明であるが、この事は開田工事を行う際の地場しめ時に於ける工事段階にこんな置き石をして何かの目安に用いたものと考えられる。

他の集石3,4号(グリッドG 8)13号(グリッドE 7)は凹地に検出され、こまかい石から大きな石で10cm大位まであり、規模も前者より大きくローム層にくい込む様に集石されていたが、集石内には遺物は検出されず、その関連性及び時期決定については不詳である。(小木曾)



第32図 その他の集石造構

(標高算出例 100 = 631.0 m)

その他の 集石 No	位 置	規 模	材 質	個 数	大き さ	レ ベル
1号	G 6	55 × 35 cm	花崗岩	19	3 cm ~ 12 cm	133.0 ~ 139.0
2	F 7	55 × 30	"	11	8 ~ 20	126.5 ~ 142.5
3	G 7	160 × 135	"	49	5 ~ 30	150.5 ~ 160.5
4	G 7	125 × 120	"	42	5 ~ 42	164.5 ~ 168.5
5	F 8	53 × 45	"	27	2 ~ 14	130.5 ~ 134.0
6	F 8	45 × 45	"	12	2 ~ 13	132.0 ~ 138.5
7	F 8	45 × 25	"	5	5 ~ 15	130.0 ~ 134.5
8	G 8	55 × 37	"	16	2 ~ 15	132.0 ~ 136.5
9	G 8	85 × 65	"	21	3 ~ 20	137.5 ~ 142.5
10	G 8	50 × 35	"	13	3 ~ 15	132.0 ~ 134.5
11	H 8	50 × 35	"	8	3 ~ 21	136.0 ~ 138.5
12	G 9	115 × 50	"	12	3 ~ 18	129.0 ~ 134.0
13	E 7	110 × 140	不明	小石 2 ~ 10		不明

### 溝状造構（第5図）（第33図）

本造構は、C9, C10, D10, E10の4グリッドにまたがって検出され、ローム層を掘り込んで構築した溝状造構で、東西にどの様に延長されているか、その規模については、今回の発掘調査では時間的余裕がなく全貌を知る事が出来なかった。

発見された部分の溝の長さは約10m、ローム層を切った上部から見える落ち込み幅は約1m前後で、東西にはほぼ直線的になっている。D10グリッドの溝の中央上部に直径約60cmの円形に焼土が検出され、そのそばに灰釉陶器片(碗の口縁部)1個と土師器破片4個及び土師器内黒破片1ヶが出土した。

又焼土の西側には直径1.3m位の規模の集石14号が検出された。恐らく平安時代に関連をもつ造構と思われる。

溝の形態を調査するために、時間的に余裕がなく、全掘出來なかつた為、ただ1ヶ所であるが断面調査を行つた。その結果第33図に示すとく、溝の幅はロームの上で約70cm、深さは表土（地場）から77cm、ローム切り込み部分から65cmあり地場から下は埋土及び自然の堆積土で埋まつてゐた。埋土の部分は褐色土とローム塊との混合で、その下中央部に黒褐色土、その下に溝の最下部まで黒土が堆積していた。壁面は固く、壁の立ち上りは北側では急傾斜になり、南側はやゝ傾斜がゆるくなつて、底より約10cm位上つた所に一段あり、この段のところに少量であるが木炭が検出された。段より下はやゝ箱形状になつており、底部は平らで、ロームに水分を含んでゐる為にやゝ軟かくなつてゐたが、砂等の沈澱物は検出されなかつた。本造構の用途及び時代決定は困難で、今後の研究に待つ事としたが、現発掘時点では、種々の状況把握の上で、あえて一考察を加えて置きたい。附近の地形から見て、この溝の構築された場所はやゝ小高い所に位置していることから、高所へ水を引いていく以外は、雨水等を集めて流すと云う性格のものとは考えられない。水が流れれば必ず川底に砂等の沈澱物が検出される事は勿論、両壁に必ず変化が認められなくてはならない。一説には集団の境界（なわばり）的なものに溝などを作ったとも云われているが、当地に於ては地形上西側うしろには段丘状の山を背にし、北側には小高い山をもつてゐる点では境界的なものは必要ないものと云えよう。おそらく本造構の場合に於ては、何軒かの集団があつてその者達が外部からの侵入者、人間ばかりでなく田畠の農作物を荒す外敵を防衛する為に、一種の屏とも云うべき垣根を作り、その下に溝と云うより小さな壕を掘つたものではないかと

(125)

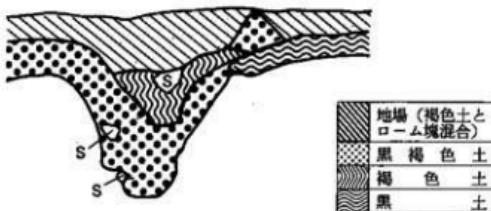
630.75

(北)

考えられないだらうか。

遺物の出土状態は前述通りで、溝上に検出されたものは9点ほどあり、平安時代の灰釉陶器破片1、土師器破片4、土師器内黒破片1、庄ノ烟式にされると思われる土器片1、黒曜石破片（使用痕あり）1、硬砂岩の石器剥片1、溝内で壁上黒土中より庄ノ烟式に

(165)



第33図 溝状造構断面図(1:20)

比定出来る土器片 1 が検出。(小木曾)

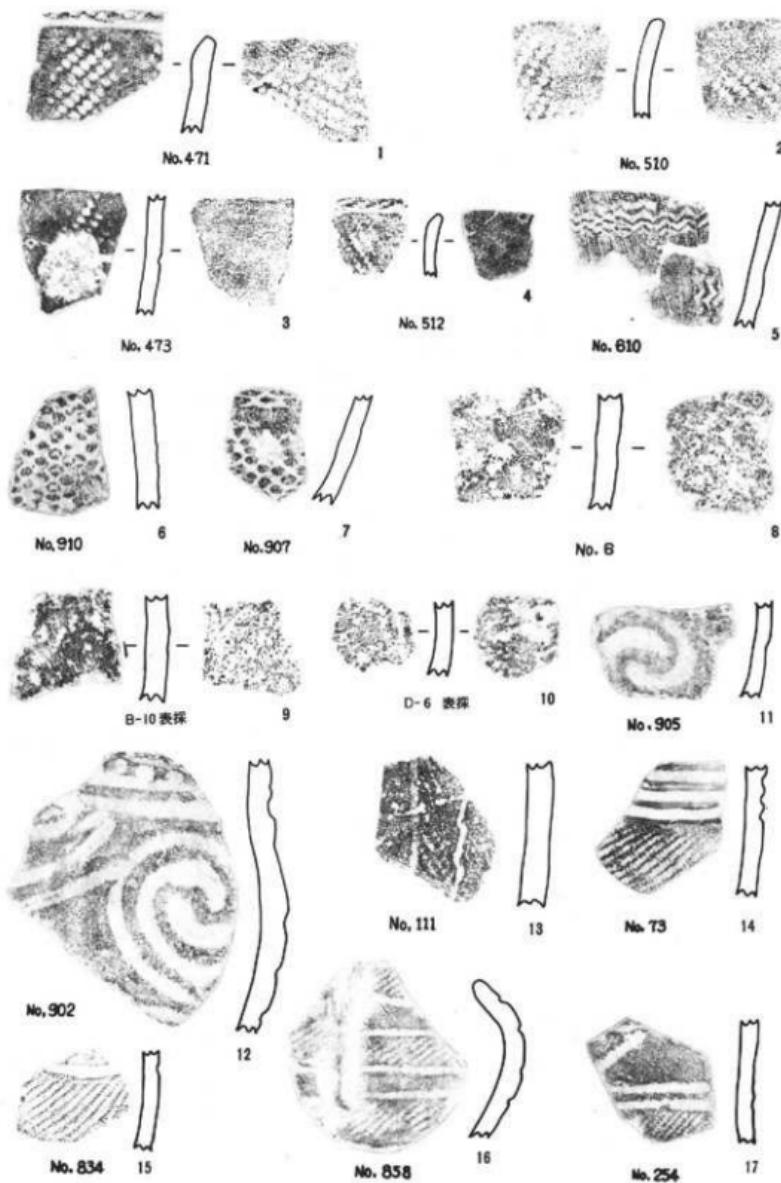
#### 遺構外出土遺物

##### 土器 (第34図・第35図)

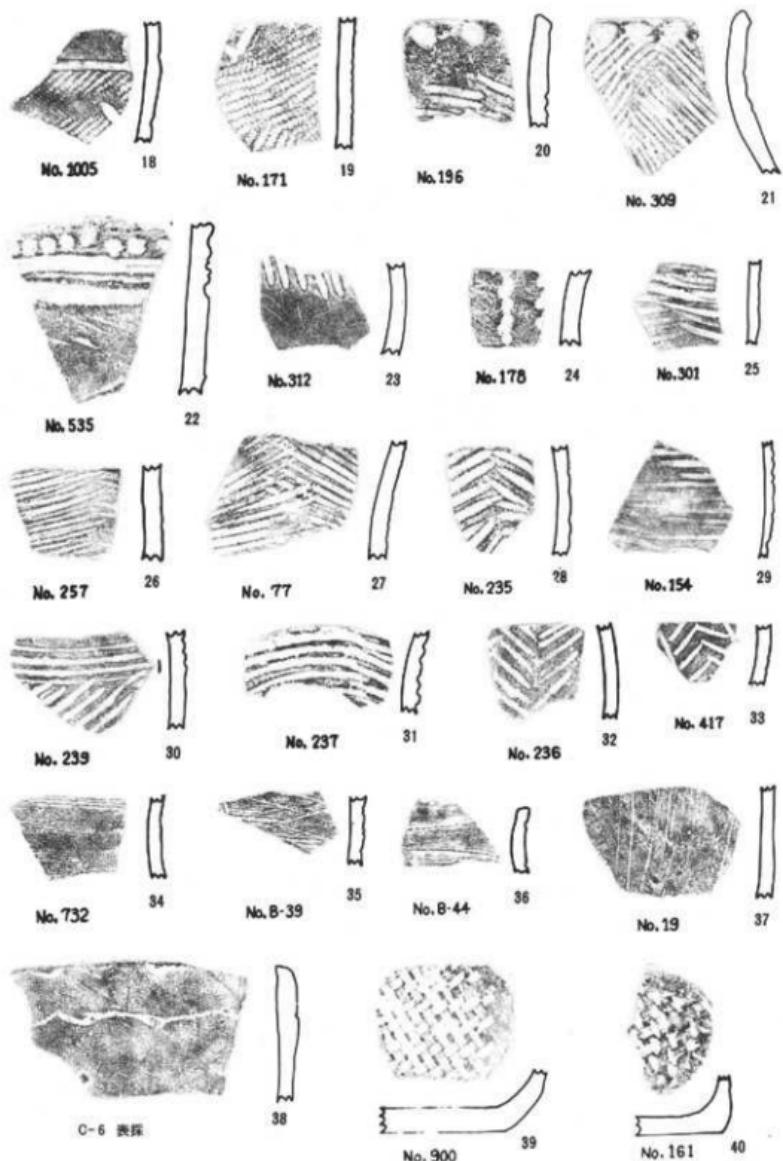
遺構外から出土した土器を一括した。1はI群土器、表裏の両面と口唇に回転繩文が施され器厚5mmの壺形土器の口縁部破片、表面はLRの原体を内面口縁下8~9cmからRLの原体回転施文された土器、胎土に石英粒と金雲母を含み、色調は灰褐色、表面に黒煙が付着している土器である。2は表裏両面に回転繩文が施された壺形土器で、口唇に1のような繩文の施文がない土器、3は表面のみに繩文が施された土器、4は表面と口唇に繩文が施された表裏繩文土器。5はII群土器、横位と縦位に山型文が施された押型文土器、6は横円文の押型文土器、7はあまり明かでないが格子目文と横円文が施された押型文土器。8~10は垂文で織維を含んでいるII群1類繩文早期末に比定される土器。11、12は渦巻文をもつII群3類、13は地文が繩文で縦に沈線と結節文とのII群3類。14、15は繩文と沈線文が施されたII群4類繩文後期と考えられる土器。16は無類の小形壺形土器で、地文に繩文が施され横位に4本の沈線が引かれ縦に隆帯貼付されているII群5類晩期に比定される土器。17は繩文と沈線文が施されたII群庄之烟に属する土器。18は磨消文のあるII群5類の土器。19は羽状文のあるII群5類に属する土器。20~21は口縁部に指圧痕が施された条痕文土器。22は口縁部に近い壺形土器、凸帯に指頭痕をめぐらしその下部に2条の沈線を施し頸部以下は篠状器具によるまばらな沈線文がうかがわれるII群5類の土器と考えられる。23は竈状器具で沈線が施されているIII群2類の土器と思われる。24は細い竹の先で連続刺突を施したIII群2類の土器。25~30は条痕文土器のうち石英粒を多量に含む類でIII群2類の前に位置される土器と思われる。31は条痕が横位に施された壺形土器の頸部破片、32~33は沈線による綾杉文が施されたIII群2類土器。34~37は先端が偏平な櫛状工具による横縦斜に施文された条痕文土器でIII群2類庄之烟式土器。38は無文の粗製土器II群5類と思われる。39~44はアジロ底部II群4類の土器と思われる。(友野)

#### 石器 (第36図)

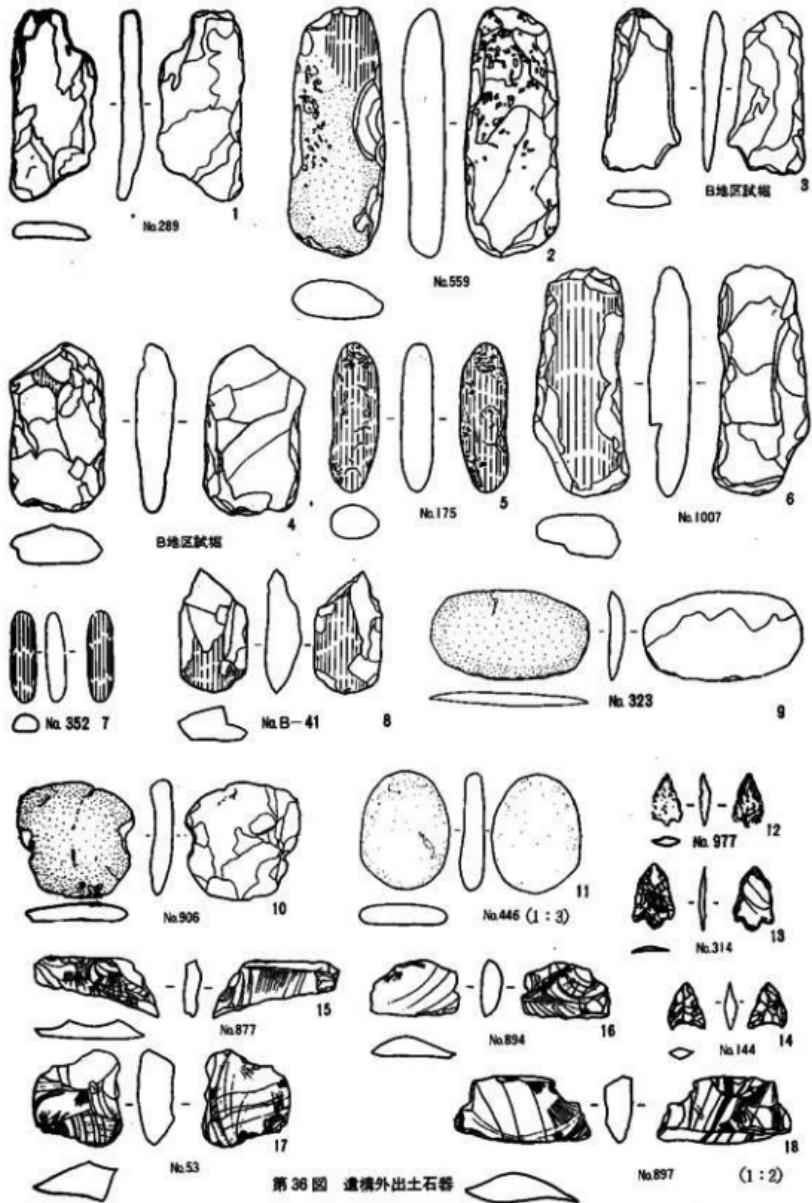
弥生時代定型的な磨製石斧はないわけではないが、量的には打製石斧が多い。原石は繩文時代と同じ硬砂岩や緑泥変岩である。製法は粗雑でかならずというほど一面に自然面を残し、剖面と自然面は鋭い刃をつくっている。1 (No. 289) 緑泥変岩で自然面を残している楔形の打製石斧。2 (No. 559) 緑泥変岩で表面は自然面を多く残し一部が極端に磨製されている短冊形打製石斧。3, 4は緑泥変岩の楔形打製石斧。5 (No. 175) 両端が磨かれている硬砂岩の棒状石器。6 (No. 1007) は緑色岩の自然面を残している短冊形打製石斧。7 (No. 352) 5と同じ棒状石器である。8 (B-41) 緑泥変岩の自然面を残し、刃部が磨製されている短冊形打製石斧。9 自然面を残した硬砂岩の横刃形石器。10は表面に自然面を残した硬砂岩の石鍬、重さ40g。11硬砂岩の磨石。12は有茎石鍬黒曜石。13は有茎黒曜石の石鎌。14は無茎の黒曜石の石鎌。15は黒曜石のナイフ形石器。16~18は不定形の石器を一括して搔器とした。削器その他多くの用途をもつものと考えられる。ほとんど剥片に簡単なタッチを加えたてど黒曜石製である。(友野)



第34図 遺構外出土器(1:2) 1~17



第35図 遺構外出土土器(1:2) 18~39



第36図 遺構外出土石器

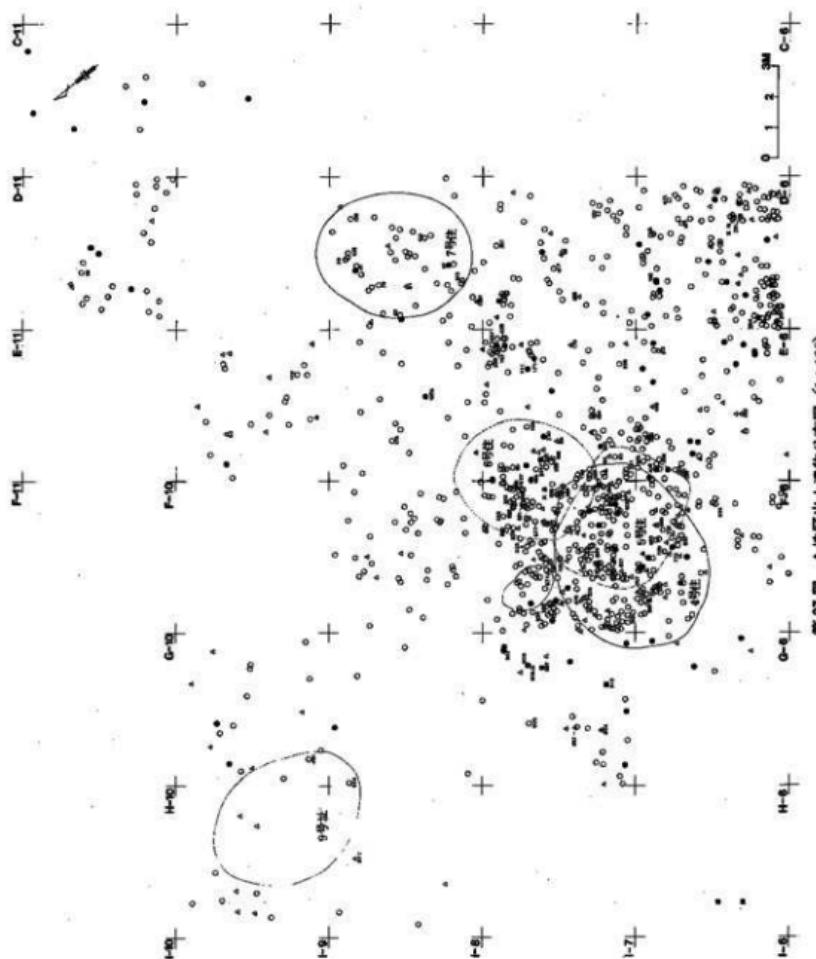


图37 A地区出土遗物分布图 (1 : 160)

## 結語

今回の調査によって得られた成果は意外に大きかったのであるが、ここではそのなかの主要な点をあげて結語したい。

1. 調査の内容については前章で詳しく述べてあるので省略する。今回の調査で特筆すべきことは、弥生時代中期初頭の住居址と、それに伴う遺物が多く出土したことである。伊那地方ではこの時期の遺跡は少なく、もっとも研究ができなかった時期の一つでもあった。当遺跡発見の中川村でも茶堂遺跡をはじめ最近幾つかの遺跡が見つかっていることは、今後波及期における弥生時代の研究に資する所が大きいものとして注目して行かなければならぬと思う。

2. 発見された住居址を見ると、A地区では4, 5, 6, 7号住居址群2類の土器を出土する住居址で、その形態は5号住居の隅丸方形の外は4, 6, 7号は楕円形である。規模は3~6m内の範囲にとどまる。B地区ではA地区とはまったく異なり、形態は1, 2, 3号住居址とも隅丸方形で、しかも南北にはば等間隔に並列している状態はA地区的分布状況とは相違している。また、住穴も住居の壁外に一定の間隔をもった母屋柱と思われるピットが認められたことは、弥生時代の住いの建築上の在り方とも合せ今後の問題とされる事柄の一つであろう。それから、B地区的1~3号の住居内の炉址の左右対象の位置にピットが設けられている状態は、今まで他で見られない例である。おそらく炉に関係あるものと思われる。

3. 集石、A地区、B地区共に造構に關係をもつのではないかと思われる位置に集石が発見された。この集石は一部配石と考えられる個所も見受けられるが、全般から見るとやはり流石状の集石と考えられる点が多いので、今回発見の集石は自然的のものとして処理することとしたが、こうした集石の附近に造構が発見される例が多いので、今後の研究にまちたい。

4. 遺物、土器、発見された土器をI~IV群に分類した。I群Aは縄文草創期の表裏縄文土器。この表裏縄文土器は表裏に縄文が施されているものと、表面のみであるものと二種類が検出された。この表裏縄文は宮田村向山遺跡や権の湖遺跡出土の表裏縄文と類似し、室谷II式土器に比定されるものと考えられる。II群1類B土器は縄文早期押型土器で、山型帶状は桶沢式に比定されるものと考えられる。そのほか同一層位より楕円形も発見されているCは繊維を含んだ条痕土器で、柏畠、茅山系の土器。2類A土器は縄文前期初頭の土器で刈谷原出土の土器が若干発見された。2類Bの前期中葉及びCに位置される後葉の土器は発見されなかった。3類、繊文中期である。A、Bの前葉から中葉の土器は見当らずCの後葉曾利II~III式に比定される土器が出土した。4類は縄文後期で、加曾利B式に比定される土器が若干出土した。5類土器は縄文晚期の土器でAは水I式に比定されるもの、Bは楕円式の新しいところの土器が若干出土した。III群1類土器は弥生時代前期水神平式に比定される土器。2類は中期の土器である。本遺跡の住居址は2類の庄之烟式に比定される土器に類するものである。IV群の古墳時代の土師器、須恵器が若干と、V群の平安時代の灰陶陶器がわずかに発見された。

石器、今回発見された石器のうち打製石斧は石包丁の外はIII群2類に属するものは石包丁ぐらいであって他は類別は困難である。ただ問題になるのは從来有背扁状形の石器が弥生時代の遺跡から多く出土しているので、弥生時代とされているが、今年本村縄文中期後葉上の原遺跡から同形の有背扁状形石器が出土しているので今回は研究中と言ふことで処理した。

原田遺跡は十分な調査でないので、土器の地域的な在方を論ずる段階にいたっていないが、土器の分類のなかに楕円式の段階が存在していることはたしかであるから、弥生土器への組成上の変化より水遺跡などの様式的な土器群を成立していったものと思われる。伊那盆地にあっては、東海系水神平式の段階との地域差をみながらもほぼ縄文系土器文化圏に包括されていったようである。

この地域では水神平式期に縄文文化は次第に崩壊の方向にむかっていたようであるが、まだ縄文文化の段階は土器組成の面では残ったようである。このように土器組成の形態的な特徴が完全に拭い去られ弥生土器としての様式が完成されるのは庄之烟式の段階であると考える。

参考文献

- 愛知県教育委員会 1972 「貝殻山貝塚調査報告」
- 磯崎正彦 1959 「長野県篠ノ井市伊勢宮遺跡の古式弥生土器信濃 11-6」
- 稻垣甲子郎他 1975 「駿河山王」富士川町教育委員会
- 大沢和夫 1969 「月夜平第一次調査報告書」高森町教育委員会
- 太田 保 1971 「長野県上伊那郡中川村片桐刈谷原遺跡—括出土土器長野県考古学会誌 10」
- 神村 透 1967 「豊丘村林里遺跡」長野県考古学会誌 4
- 気賀沢進他 1979 「荒神沢遺跡」駒ヶ根市教育委員会
- 紅村 弘他 1960 「篠東第一次調査報告書」愛知県小坂井町教育委員会
- 紅村 弘 1967 「水持平式土器とその周辺」信濃 19-4
- 紅村 弘 1979 「水持平式土器の諸問題」東海先史文化の諸段階資料 II
- 笛沢 浩 1968 「善光寺平における栗林式土器直前の土器」信濃 20-4
- 笛沢 浩 1978 「中部高地型櫛文の系譜」中部高地の考古学
- 鈴木公雄 林謙作 1981 「绳文土器大成」4 晩期 講談社
- 澄田正一、大三義一 1968 「新編一宮史資料編 2 弥生時代」
- 岩野見司
- 戸沢充則 1953 「長野県岡谷市庄ノ畑遺跡再調査」信濃 5-10
- 戸沢充則 1965 「後晩期の縄文式土器群」井戸尻
- 長野県教育委員会 1973a 「うどん坂 II 遺跡」長野県中央道遺跡埋蔵文化財、包蔵地発掘調査報告書、上伊那郡板島町内その 3
- 長野県教育委員会 1973b 「北高根 A、南高根遺跡」長野県中央道遺跡埋蔵文化財、包蔵地調査報告書、上伊那郡南箕輪村 1 の 2
- 永峰光一 1965 「中部」「日本の考古学 II」
- 永峰光一 1969 「永遺跡の調査とその研究」石器時代 9
- 根津清志 1973 「鶴蔵浦遺跡」「中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」西春近
- 伴 信夫 1976 「一の沢遺跡」「中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」茅野、原村その 1、富士見町その 2、長野県教育委員会
- 樋口昇一他 1980 「経塚遺跡」「長野県中央道埋蔵文化包蔵地発掘調査報告」岡谷その A
- 藤沢宗平 1955 「南信刈谷原出土遺物について」上代文化 25
- 藤沢宗平 1966 「長野県松本市横山城遺跡—松本平における弥生文化初期の住居址とその出土土器」信濃 18-7
- 藤森栄一他 1966 「岡谷市庄之畑遺跡」「長野県考古学研究報告書 1」
- 増子康真 1975 「東海先史文化の諸段階」本文編
- 丸山盛一郎 1966 「長野県下伊那郡平岡南遺跡出土遺物について」信濃 18-4
- 宮沢恒之 1973 「城ノ平遺跡」長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書伊那西春近地区
- 設楽博己 1982 中部地方における赤生土器の成立過程 信濃 34-4

---

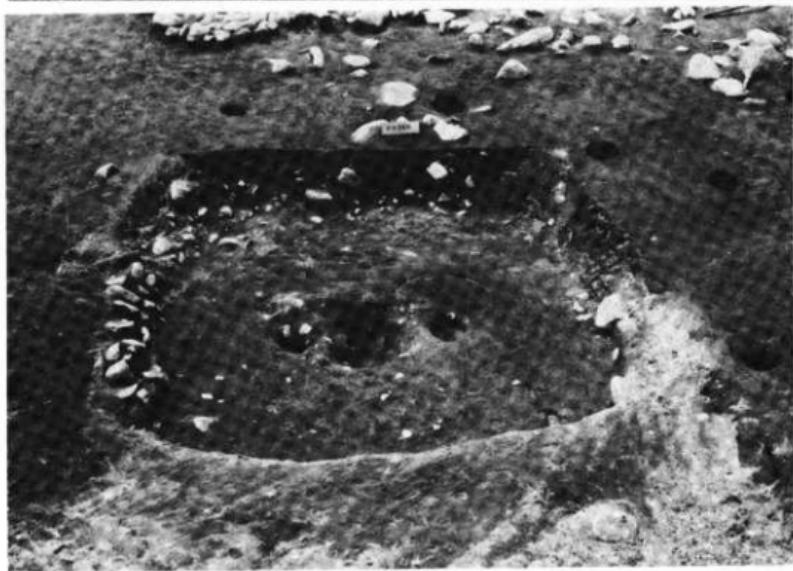
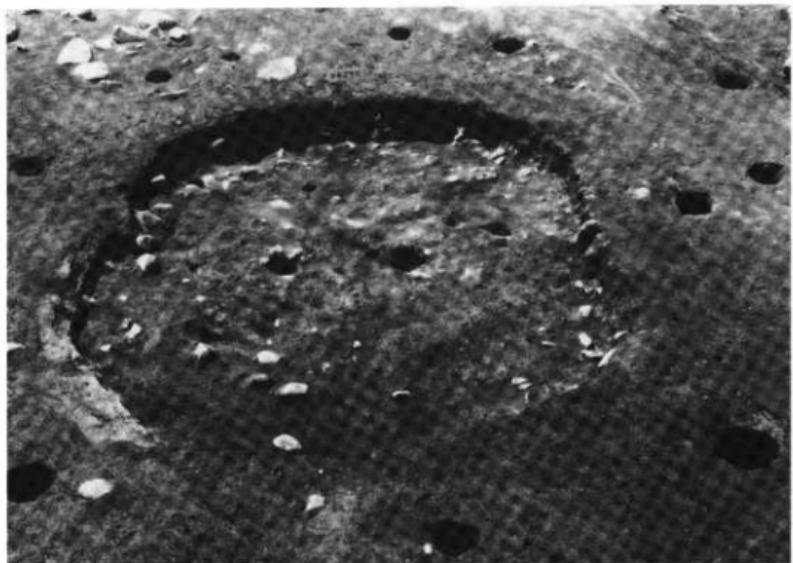
資料 図 版

---

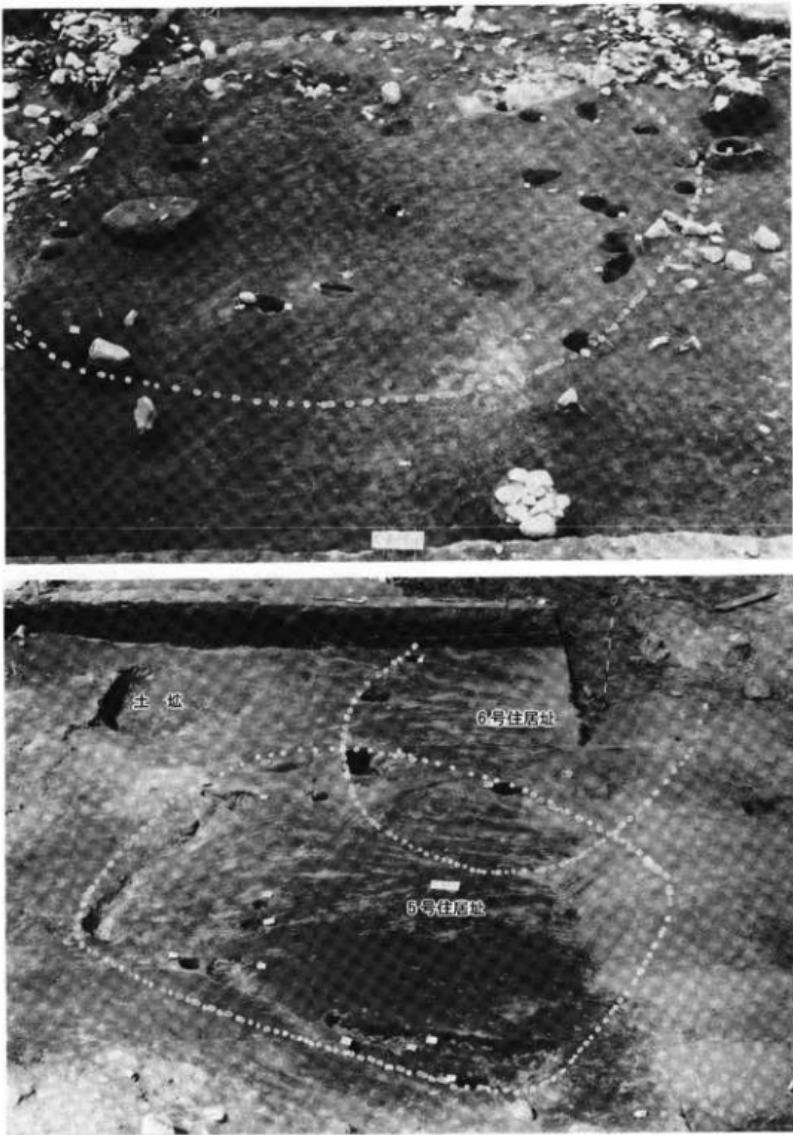
図版1 原田遺跡の遠景(上), 第1号住居址(下)



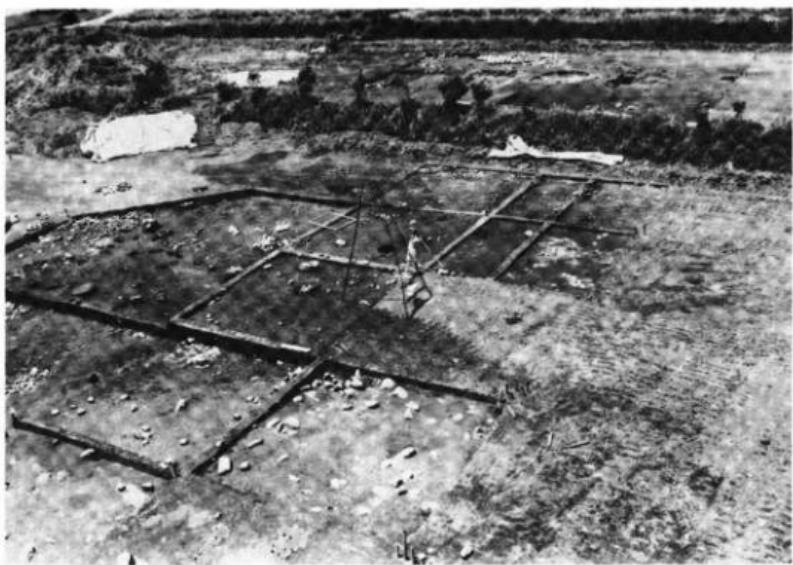
図版2 第2号(上)、第3号(下) 住居址



图版3 第4号(上), 第5号(下) 住居址



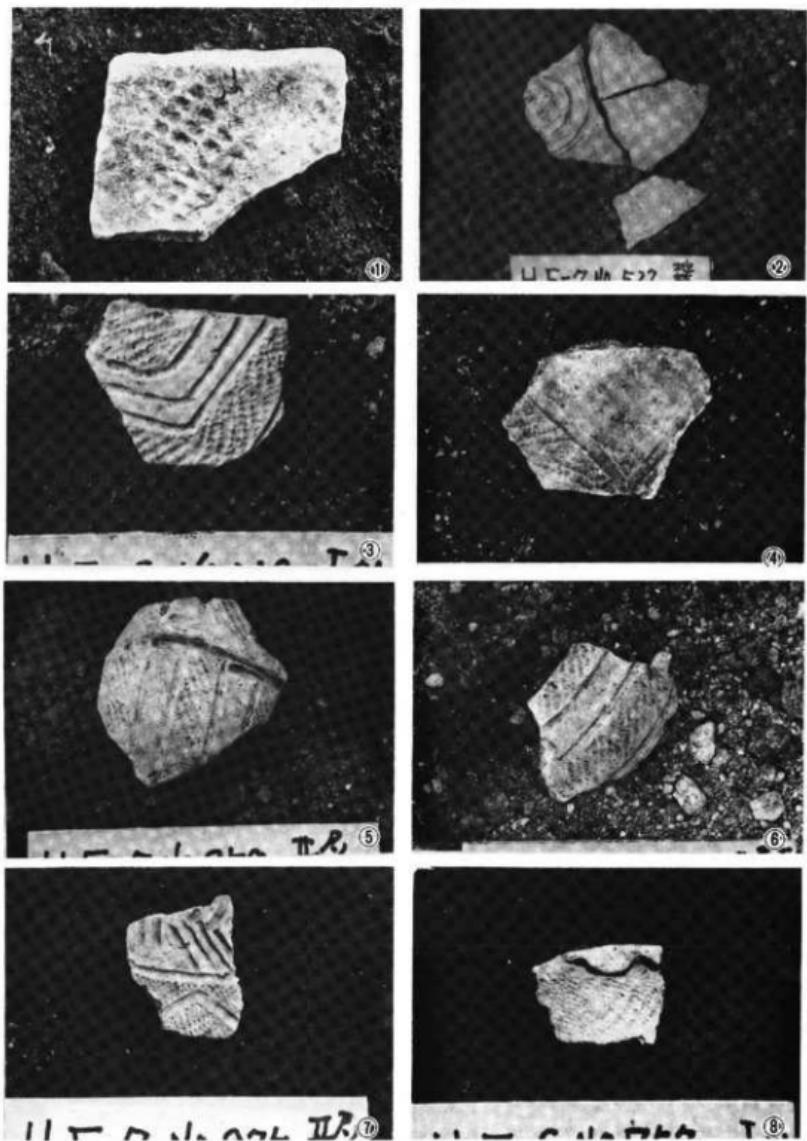
図版4 第7号住居址(上), 原田遺跡発掘全景(下)



図版5 原田遺跡A地区発掘状況(上), 発掘調査参加者(下)

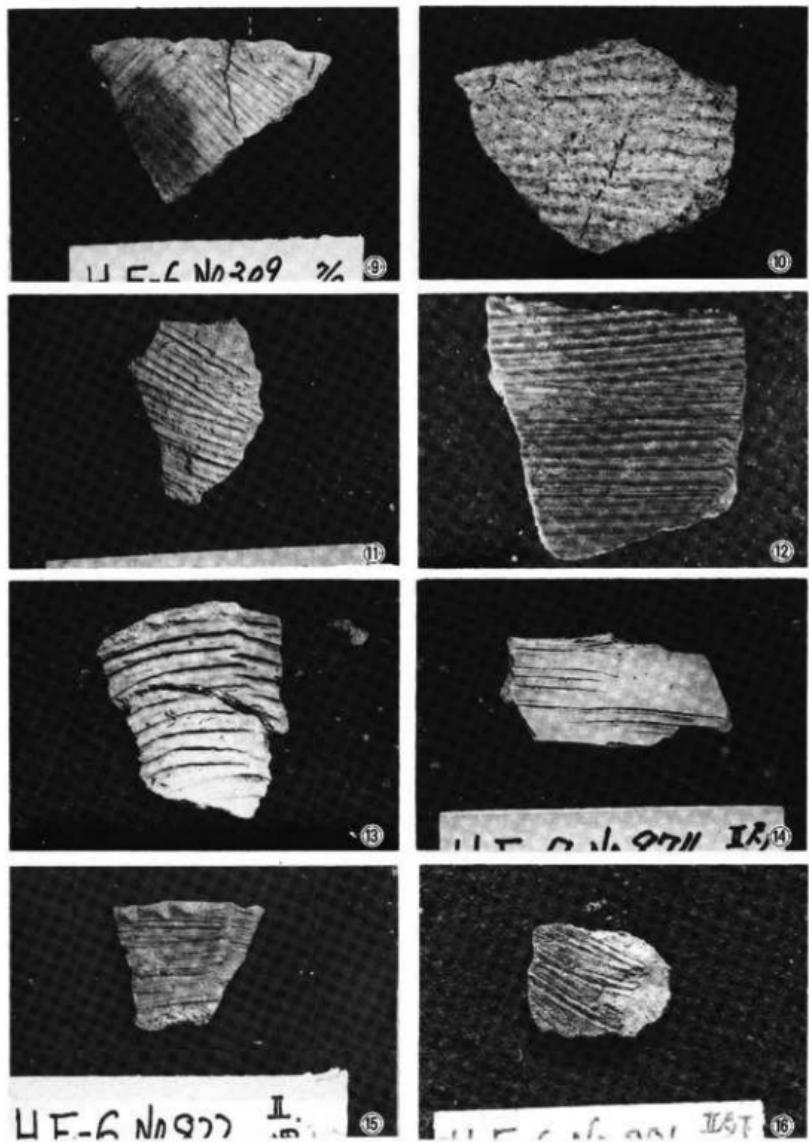


図版6 遺物出土状況Ⅰ



①D-6 ②F-7 ③F-6 ④F-7 ⑤F-7 ⑥F-7 ⑦F-7 ⑧F-6

図版7 遺物出土状況II



(9)E-5 (10)D-6 (11)F-7 (12)E-6 (13)E-7 (14)F-7 (15)F-6 (16)F-6

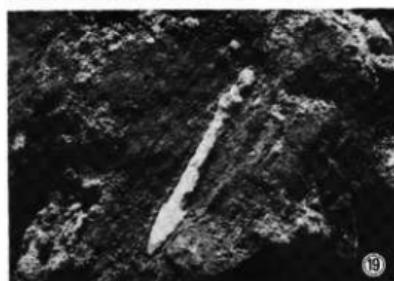
図版 8 遺物出土状況Ⅲ



17



18



19



20



H F-6 No 770

21



I T 2 14 22 II 4 22

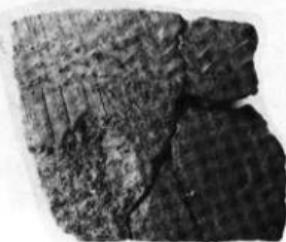
22

⑦D-6 ⑧E-6 ⑨K-7 ⑩D-6 ⑪F-7 ⑫F-7

図版9 出土遺物 I



①



②



③



④

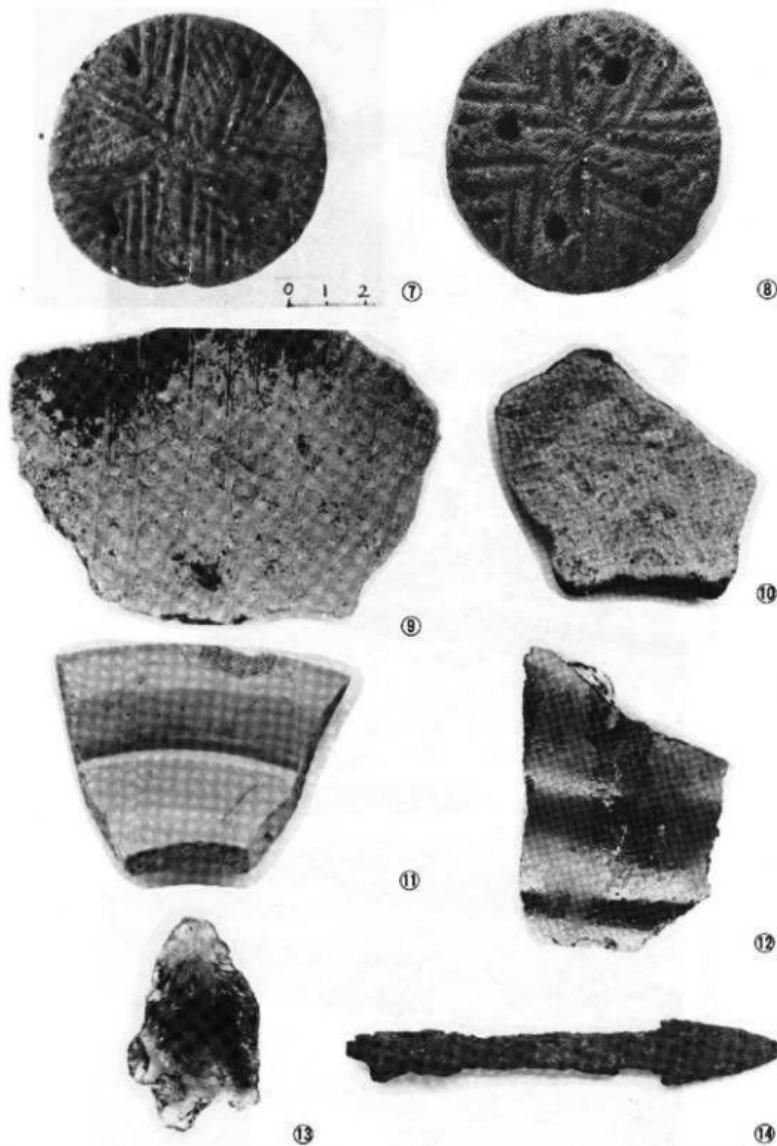


⑤

⑥

①表裏繩文 ②山型押型文 ③捺円押型文 ④織維土器 ⑤弥生式土器 ⑥条痕文土器

図版 10 出土遺物 II



⑦円形装飾土器 ⑧円形装飾土器 ⑨条線文土器 ⑩縦目文土器 ⑪青磁皿青磁皿破片 ⑫天目茶碗 ⑬有柄石鎌 ⑭鉄鎌

図版 11

桑糞貯入式



B 地区発糞状況



A 地区発糞状況



**原田遺跡** 長野県上伊那郡中川村片桐原田

昭和57年3月

発行 中川村教育委員会

長野県上伊那郡中川村

印刷 藤原印刷株式会社

松本市新橋7-21